【創造工学専攻】

【建設環境工学コース】

創造工学専攻 建設環境工学コース

1. 学習・教育目標

建設環境工学コースでは次の学習・教育目標を設定しています。

(A) 広い視野と技術者としての倫理観（倫理）

(A-1) 広い視野を持ち、地球規模での環境問題やエネルギー問題などの社会問題を認識し、それらを説明できる。（広い視野）

(A-2) 建設技術者として、その行動が社会や自然に及ぼす影響と責任を認識し、技術者として持つべき倫理観について自己の意見を説明できる。（技術者倫理）

(B) 科学技術の基礎知識と応用力（知識）

(B-1) 自然科学(数学, 物理, 化学)に関する十分な基礎知識を持ち、応用問題を解いたり、資料・文献等を用いて問題を解決したり、報告書をまとめたりすることができる。（自然科学の基礎知識）

(B-2) 専門分野(土木工学)に関する十分な基礎知識を持ち、応用問題を解いたり、資料・文献等を用いて問題を解決したり、報告書をまとめたりすることができる。（土木工学の基礎知識）

(C) 課題解決の実行力と豊かな創造力（実行力）

(C-1) 課題に対して自発的に取り組み、創意工夫できる力を身につける。（課題の遂行）

(C-2) 特別研究のテーマについて、計画を立案し、実行し、結果を取りまとめ、報告書を作成する一連の作業に自発的に取り組み、指定された期限までにそれをやり遂げられる。（特別研究の遂行）

(D) 論理的なコミュニケーション能力（コミュニケーション）

(D-1) 課題に対する成果について、報告書、概要集原稿、論文集原稿などの形でまとめることができる。（報告書等の作成）

(D-2) 課題に対する成果を研究室、研究発表会、学術講演会などで口頭発表し、質問に対して対応できる。（口頭発表と質疑応答）

(D-3) 英語でアブストラクトを書くことができる。（基礎的な英語力）

(E) 総合的な設計能力（設計）

(E-1) 専門科目の知識を応用し、必要な資料を調べながら社会基盤に関する設計を行うことができる。（設計力）

(E-2) コンピュータおよび様々なアプリケーションソフト・機器を有効に利用して設計に用いることができる。（コンピュータ等の有効利用）

各科目のシラバスには、学習・教育目標との関係が示されています。全科目の学習・教育目標と科目の関連についても以降に示す「学習・教育目標と科目関連図」にまとめています。コース目標が達成できるように必修科目等を配置していますが、選択科目の履修の参考にして下さい。

2. 専攻科の修了要件について

専攻科を修了するための要件は次の通りです（学位取得に関する要件は含みません）。

単位数に関する要件：

教養科目（必修科目＋選択科目）＋工学基礎科目（必修科目＋選択科目）： 16 単位

専門科目（必修科目＋選択科目）： 46 単位

合計： 62 単位

科目の修得に関する要件：

必修科目： 必ず修得する。

コース必修科目： 必ず修得する。

コース選択必修科目： 必要な単位数を修得する。

コース必修科目は、本シラバスにも掲載されている「授業科目学年配当表（創造工学専攻）」

において、選択科目（教養科目，工学基礎科目，専門科目）の中で○印で示されてる科目を指します。コース必修科目は必ず修得する必要があります。

コース選択必修科目は，同表において，選択科目（教養科目，工学基礎科目，専門科目）の中で△印で示されている科目を指します。教養科目または工学基礎科目については，コース選択必修科目の中から合計2単位以上修得する必要があります。専門科目については，コース選択必修科目の中から合計10単位以上修得する必要があります。

開設単位数と修得単位数（専攻科学生便覧からの抜粋）

	開設単位数					修得すべき単位数			
	◎ 必修	○ コース 必修	△ コース 選択必修	(空欄) コース 選択	計	◎ 必修	○ コース 必修	△ コース 選択必修	必要単位数
建設環境工学コース									
教養	4	—	4	—	8	4	—	4	16 単位以上
工学基礎	4	6	8	1	21	4	6		
専門	20	16	12	3	51	20	16	10	46 単位以上
合計	28	22	24	6	80	28	22	14	62 単位以上

3. 評価方法

最終総合評価は，各科目の評価方法欄の記述に従って100点満点で評価され60点以上を合格とします。ただし，備考欄に別途，合格判定・評価に関する記述があれば，それに従うものとします。

4. 学習内容（学習項目（時間数），学習到達目標）

学習内容欄には，学習項目と学習時間，およびその項目に対する学習到達目標が記載されています。学習到達目標は，その科目を合格（最終総合評価が60点以上）するための最低習得事項の目安を示しています。

専攻科で開設される科目の全ては学修単位科目であるため，授業以外に下記の自学自習を要します。

- 授業形態が「講義」である科目：学習時間の2倍相当の自学自習が必要
- 授業形態が「演習」である科目：学習時間の半分相当の自学自習が必要

進め方の欄には各科目における自学自習のガイダンスが記載されています。また備考欄には，科目ごとの自学自習の時間数が記載されていますので，取り組んでください。

5. 学位の取得について

「学士(工学)」の学位を取得するためには，学位授与に関する審査に合格する必要があります。入学年度別に提示される「科目表」で規定される科目を一定数以上修得する必要があります。履修が必要な単位および単位数は，専攻科の修了要件とは異なりますので十分注意して下さい。学位授与に関しては，学年毎にガイダンスが行われます。

建設環境工学科・建設環境工学コース 学習教育目標と科目関連図

本科						専攻科				
科目群	本科1年	本科2年	本科3年	本科4年	本科5年	科目群	専攻科1年	専攻科2年	後期	
(A) 広い視野と技術者としての倫理観 (倫理)										
(A) 広い視野を持ち、自然との調和を図り、人類の幸福に寄与できる技術者を養成する。【倫理】						(A-1) 広い視野を持ち、地球規模での環境問題やエネルギー問題などの社会問題を認識し、それらを説明できる。(広い視野)				
(A-1) 社会や文化に関する教養と社会人としての広い視野を身につける。						社会 ○技術者倫理 知的財産権 ○環境倫理・マネージメント				
社会 ○地 理 ○歴 史 II ○公 民 II 人文科学 社会科学 ○歴 史 I ○公 民 I 言語 ○国 語 I ○国 語 II ○国 語 III 文学特論 I 語学特講 芸術 ○芸 術 I ○芸 術 II ○キャリア概論 校外実習 校外実習						社会 ○経済論 ○技術者倫理 法学 ○国 語 I ○国 語 II ○国 語 III 文学特論 I 語学特講 ○国 語 I ○国 語 II ○キャリア概論 校外実習 校外実習				
(A-2) 建設技術者としての行動が社会や自然に及ぼす影響について考える力を身につける。						(A-2) 建設技術者として、その行動が社会や自然に及ぼす影響と責任を認識し、技術者として持つべき倫理観について自己の意見を説明できる。(技術者倫理)				
6. 環境 ○工学基礎 ○環境原論 ○環境工学 I 環境工学 II ○地域環境学 環境アセスメント 環境工学特論										
(B) 科学技術の基礎知識と応用力 (知識)										
(B) 科学技術の基礎知識と応用力を身につけ、時代の変遷に対応できる技術者を養成する。【知識】						(B-1) 自然科学(数学、物理、化学)に関する十分な基礎知識を持ち、応用問題を解いたり、資料・文献等を用いて問題を解決したり、報告書をまとめたりすることができる。(自然科学の基礎知識)				
(B-1) 工学分野の基礎となる自然科学の基礎知識を身につける。						(B-1) 自然科学(数学、物理、化学)に関する十分な基礎知識を持ち、応用問題を解いたり、資料・文献等を用いて問題を解決したり、報告書をまとめたりすることができる。(自然科学の基礎知識)				
数学 ○基礎数学 I ○微分積分 I ○微分積分 II ○建設応用数学 I 建設応用数学 II ○基礎数学 II ○基礎数学 III ○数理演習 物理 ○物 理 I ○物 理 II ○物理学基礎 I 物理学基礎 II 化学 ○化 学 I ○化 学 II 環境化学 物理化学基礎						数学 ○数学特論 I 数学特論 II 建設数理計画学 物理 ○応用物理学 現代物理学 ○物理化学 化学 特別講義 分析化学 特別講義				
(B-2) 専門分野に関する基礎知識を身につける。						(B-2) 専門分野(土木工学)に関する十分な基礎知識を持ち、応用問題を解いたり、資料・文献等を用いて問題を解決したり、報告書をまとめたりすることができる。(土木工学の基礎知識)				
1. 測量 ○測量学 I ○測量学 II 測量学 III 2. 材料 ○建設材料学 3. 構造 ○建築力学 I ○建築力学 II ○建設構造設計学 構造力学 II 構造工学 建築構造学 4. 地盤 ○基礎力学 I 土の力学 地盤工学 5. 水理 ○基礎力学 II 水理学 河川水文学 海岸工学 7. 計画 ○計画学基礎 ○地域計画学 8. 国土・法務 建設工学 9. 情報処理 ○基礎情報処理 ○応用情報処理 応用データ処理学 情報処理工学 10. 製図 ○図学基礎 ○建設環境工学設計製図 I ○建設環境工学設計製図 II その他 ○工学基礎 ○防災工学基礎 ○物理防災学 電気工学概論 特別講義 II						水理 流体力学特論 構造 ○前置設計学 ○耐久設計学 ○建設材料特論 建築力学 計画 社会基礎計画学 情報処理 ○情報システム ○コンピュータ構造解析 防災 ○環境防災工学 I ○環境防災工学 II				
(C) 課題解決の実行力と豊かな創造力 (実行力)										
(C) 課題解決の実行力と創造力を身につけ、社会に有益なシステムを構築できる技術者を養成する。【実行力】						(C-1) 課題に対して自発的に取り組み、創意工夫できる力を身につける。(課題の遂行)				
(C-1) 課題に対して自発的に取り組み、成果物を指定された期間までに完成できる。						(C-1) 課題に対して自発的に取り組み、創意工夫できる力を身につける。(課題の遂行)				
実験・実習 ○建設創造基礎実験実習 I ○建設創造基礎実験実習 II ○建設環境工学実験実習 I ○建設環境工学実験実習 II ○建設環境工学実験実習 III ○建設環境工学実習 I ○建設環境工学実習 II ○建設環境工学実習 III ○建設環境工学設計製図 I ○建設環境工学設計製図 II 卒業研究 ○卒業研究 その他 ○創成工学 科学技術アロニアブ概論 校外実習						建設工学実習 建設工学概論 建設工学セミナー ○工学実験・実習 I ○工学実験・実習 II インターンシップ I, II, III, IV				
(C-2) 簡単な実験報告書、設計書、図面などを作成できる。						(C-2) 特別研究のテーマについて、計画を立案し、実行し、結果を取りまとめ、報告書を作成する一連の作業に自発的に取り組み、指定された期間までにそれをやり遂げられる。(特別研究の遂行)				
実験・実習 ○建設創造基礎実験実習 I ○建設創造基礎実験実習 II ○建設環境工学実験実習 I ○建設環境工学実験実習 II ○建設環境工学実験実習 III ○建設環境工学実習 I ○建設環境工学実習 II ○建設環境工学実習 III ○建設環境工学設計製図 I ○建設環境工学設計製図 II 卒業研究 ○卒業研究 その他 ○創成工学						実験・実習 ○特別研究 I ○特別研究 II インターンシップ I, II, III, IV				
(D) 論理的なコミュニケーション能力 (コミュニケーション)										
(D) 物事を論理的に考え表現する能力を身につけ、国際的に活躍できる技術者を養成する。【コミュニケーション】						(D-1) 課題に対する成果について、報告書、要約集原稿、論文集原稿などの形でまとめることができる。(報告書等の作成)				
(D-1) 日本語で論理的に記述、説明する能力を身につける。						(D-1) 課題に対する成果について、報告書、要約集原稿、論文集原稿などの形でまとめることができる。(報告書等の作成)				
言語 ○国 語 I ○国 語 II ○国 語 III 文学特論 I 技術作文 ○創成工学 ○卒業研究 校外実習 校外実習						実験・実習 ○特別研究 I ○特別研究 II ○工学実験・実習 I ○工学実験・実習 II インターンシップ I, II, III, IV				
(D-2) 英語による基礎的なコミュニケーション能力を身につける。						(D-2) 課題に対する成果を研究室、研究会、学術講演会などで口頭発表し、質問に対して対応できる。(口頭発表と質疑応答)				
英語 ○英 語 I A ○英 語 II A ○英 語 III A 英語 IV 英語 V ○英 語 I B ○英 語 II B ○英 語 III B 海外英語演習 特別講義 II ○語学実習(英語)						実験・実習 ○特別研究 I ○特別研究 II インターンシップ I, II, III, IV				
(D-3) 様々なスポーツ活動を通じて、社会性・協調性を身につける。						(D-3) 英語でアブストラクトを書くことができる。(基礎的な英語力)				
健康・体育 ○保 健・体 育 I ○保 健・体 育 II ○保 健・体 育 III ○保 健・体 育 IV 保 健・体 育 V						英語 ○実践英語 ○工業英語 海外語学研修 実験・実習 ○特別研究 I ○特別研究 II				
(E) 総合的な設計能力 (設計)										
(E-1) 専門科目の知識を応用し、必要な資料を調べながら社会基盤に関する設計を行うことができる。(設計力)						(E-1) 専門科目の知識を応用し、必要な資料を調べながら社会基盤に関する設計を行うことができる。(設計力)				
構造 ○前置設計学 ○耐久設計学 ○建設材料特論 防災 ○環境防災工学 I ○環境防災工学 II 計画 建設数理計画学 社会基礎計画学						構造 ○前置設計学 ○耐久設計学 ○建設材料特論 防災 ○環境防災工学 I ○環境防災工学 II 計画 建設数理計画学 社会基礎計画学				
(E-2) コンピュータおよび様々なアプリケーションソフト・機器を有効に利用して設計に用いることができる。(コンピュータ等の有効利用)						(E-2) コンピュータおよび様々なアプリケーションソフト・機器を有効に利用して設計に用いることができる。(コンピュータ等の有効利用)				
情報処理 ○情報システム ○コンピュータ構造解析 実験・実習 ○特別研究 I ○特別研究 II ○工学実験・実習 I ○工学実験・実習 II						情報処理 ○情報システム ○コンピュータ構造解析 実験・実習 ○特別研究 I ○特別研究 II ○工学実験・実習 I ○工学実験・実習 II				

注1) 上記の表中、講義は細枠線、演習は太点線、実験は大実線、実習は二重線を示す。
 注2) 上記の表中、○印は必修科目、◎印は専攻科建設環境工学コース必修科目、△印はコース選択必修科目を示す。
 注3) 網掛けは専門科目を、白抜きは一般科目・教養科目・工学基礎科目を示す。

科目名	経営論 Management Theory			担当教員	関 丈夫		
学 年	AS1	学 期	前期	科目番号	17161001	単位数	2
分 野	教養	授業形式	講義	履修条件	必修得		
学習目標	企業経営の諸側面において必要な経営学の基礎知識を習得し、これを用いて問題を解決するための能力を身につけることを目標とする。						
進め方	<ul style="list-style-type: none"> ・テキストならびに適宜配布する資料を用いた講義を行う。理解を深めるため企業経営に関する具体的事例紹介を適宜行う。 ・講義内容に関する自学自習課題を出題し、これに基づく討議等により理解を深める。 						
学習内容	学習項目 (時間数)			学習到達目標			
	ガイダンス(1)						
	1. 企業経営全般(5) (1) 社会と企業経営 (2) 経営理念・企業風土			<ul style="list-style-type: none"> ・企業の目的・役割, 危機管理, コーポレートガバナンス等経営の基本事項を理解している。 ・企業経営における経営理念の重要性, 企業風土の源泉について考える能力を有している。 			
	2. ビジョン・戦略・計画(4)			<ul style="list-style-type: none"> ・ビジョン・戦略・計画の役割と関連を理解している。 			
3. マーケティング (4)			<ul style="list-style-type: none"> ・マーケティングの意義・手法を理解している。 				
4. 生産管理(2)			<ul style="list-style-type: none"> ・生産管理・品質管理手法を理解している。 				
5. 組織・人材 (4)			<ul style="list-style-type: none"> ・組織の形態・役割, 人事管理・人材育成の手法を理解している。 				
6. 経営と資金 (6) (1) 資金の流れ (2) 原価管理 (3) 決算と経営分析			<ul style="list-style-type: none"> ・企業会計制度, 資金調達, 原価管理について理解している。 ・経営分析の基礎知識を理解している。 				
7. 技術開発マネジメント(4) (1) 研究・開発と新事業創出 (2) 知財戦略			<ul style="list-style-type: none"> ・研究開発から新事業創出までの各段階における留意事項を理解している。 ・知財戦略の概要について理解している。 				
後期末試験							
試験返却 (1)							
評価方法	期末試験 (80%) と小レポート (複数回) (20%) の総合評価による。						
学習・教育目標との関係	建設環境工学コースの学習・教育目標(A-2)「技術者倫理」に対応する。						
関連科目	公民Ⅰ (2年) → 公民Ⅱ (3年) → 社会科学Ⅱ (5学年) → 経営論 (AS1)						
教 材	教科書: 遠藤功「ざっくりわかる企業経営のしくみ」日本経済新聞出版社 参考書: 適宜紹介 その他: 適宜資料配付						
備 考	小レポートは必ず作成すること。 討議には, 積極的に参加すること。 学修単位: 授業時間以外に1週に4 (単位数×2) 時間, 計60時間の自学自習が必要である。						

科目名	実践英語 TOEIC Preparation			担当教員	市川 研		
学 年	AS1	学 期	前期	科目番号	17161002	単位数	2
分 野	教養	授業形式	講義	履修条件	必修得		
学習目標	TOEIC で最低でも 400 点を得点できる程度のリスニング・リーディングの力を身につける。						
進め方	各時間の前半 45 分はテキストを用いた講義，後半 45 分は模擬問題の演習・解説とする。 また，自学自習時間に相当する課題を毎回の授業にて出題する。						
学習内容	学習項目（時間数）			学習到達目標			
	1. リスニング写真描写問題(3) 2. リスニング応答問題(4) 3. リーディング文法語彙問題(5) 4. リーディング空所補充問題(2) 5. TOEIC 模擬試験+解説(2) 6. リスニング会話問題(3) 7. リスニング説明問題(3) 8. リーディング空所補充問題(2) 9. リーディング読解問題(4) 10. 期末試験+解説(2)			・各パートとも 40%を下回らないものとする。 ・TOEIC 模擬試験においては 380 点程度の得点を得ることができる。 ・リスニング説明問題では 30%，その他の問題では 40%を下回らないものとする。 ・TOEIC 模擬試験においては 400 点程度の得点を得ることができる。			
	前期末試験(0)						
評価方法	講義は前期で終了するが，年度末に評価を行う。評価は期末試験の得点においてなされるが，本校で実施する TOEIC(IP)，授業内で実施する複数回の TOEIC 模擬試験，本年度 4 月～12 月までに実施の TOEIC 公開テストのいずれかにおいて 400 点以上の得点を上げた者については，別に定める基準に応じて，期末試験の成績に代えることができる。TOEIC の受験は何度しても構わないこととし，原則として最も高得点を得た試験で評価を行う。TOEIC(IP)については，TOEIC 運営委員会発表による TOEIC 公開テストと IP の平均点を参考に，別途適切な基準を定める。 また，自習学習については，授業中の発言や TOEIC の得点にて確認をする。						
学習・教育目標との関係	建設環境工学コースの学習・教育目標(D-3)「基礎的な英語力」に対応する。 外国語によるコミュニケーション基礎能力を持った技術者を養成する。						
関連科目	今までに履修した英語科目全て						
教 材	各種ハンドアウト，プリント教材（教員配布）						
備 考	<ul style="list-style-type: none"> ・適宜小テストや課題を出す。課題未提出の場合は TOEIC の点数から減点し，評価とする。 ・講義終了を待たずに TOEIC 公開テストにおいて合格点をクリアした場合にも，授業への参加は必須とする。 ・学修単位：授業時間以外に 1 週に 4（単位数×2）時間，計 60 時間の自学自習が必要である。 						

科目名	法学 Jurisprudence			担当教員	河野 通弘		
学年	AS2	学期	前期	科目番号	17161003	単位数	2
分野	教養	授業形式	講義	履修条件	選択		
学習目標	社会の変化にともなう法の変化を考察することで社会における法の役割についての理解を深め、そのために必要な法理論及び法知識を習得し、健全な法的思考を育成して、社会人としての適切な判断能力及び社会性・倫理観を養う。						
進め方	随時、法の諸概念について基礎的な解説をおこなって、現代の情報社会がかかえる様々な法的な諸問題にアプローチして、問題点の発見、及び法理論の対応を考察していく。適宜、レジュメや判例資料を配布する。 自学自習時間に相当する課題をテーマごとに出題する。配布資料などをもとに事案や論点整理などをまとめた報告書・レポートを提出することになる。						
学習内容	学習項目（時間数）			学習到達目標			
	(1) ガイダンスと情報化社会の諸問題(2) (2) 情報社会と表現の自由の問題(2) (3) 表現権と名誉侵害・プライバシー侵害(4) (4) 情報社会と不法行為(2) (5) 特定電気通信役務提供者の責任(2) (6) 情報社会と犯罪・捜査手続の問題(2)			当該問題設定に関する法制度の趣旨ならびに個別の法的問題の論点整理、及びそれにと対応する法理論を論理的に説明できる。（本シラバス下記「評価方法」参照のこと） 学習・教育目標：A-1			
	前期末試験(2)						
評価方法	評価は、筆記試験の評点(80%)とレポートの提出数及びその評点(20%)でおこなう。 問題は論述問題を複数個設定し、受講者が1問選択することとする。試験の評点は、受講者が選択した問題に関して、当該法制度の趣旨、その社会的背景、考えられる法的問題点を整理できているかどうか、及びその論述の完成度（問題意識を含めてテーマの明確な絞り方、用語使用の適格さ、問題の所在に関する明確な表現、論理展開の妥当性、問題解決のための論理性など）によって評価する。筆記試験に合格しない者は、希望があれば、論文に代えて評価する。その際、提出された論文の審査は、筆記試験と同等の基準・視座で審査するが、試験より厳格に行う。 自主学習については報告書・レポート提出により確認する。						
学習・教育目標との関係	社会や文化に広く目を向け、技術者としての責任感、社会性、国際性に対する知識を通じて(A-2)「技術者倫理」を身に付ける事を目的とした教科である。						
関連科目	公民Ⅰ（2学年） → 公民Ⅱ（3学年） → 社会科学Ⅰ（5学年） → 法学(AS2)						
教材	特に指定しない						
備考	社会科学Ⅰを履修していることが望ましい。出席率 2/3 以上でなければ、前期末試験の受験、論文提出を認めない。授業時間以外に、1週に4時間(単位数×2)の自主学習の時間が必要である。						

科目名	文学作品講読 Reading of Literary works			担当教員	長原 しのぶ		
学年	AS2	学期	前期	科目番号	17161004	単位数	2
分野	教養	授業形式	講義	履修条件	選択		
学習目標	日本の近現代文学作品を通して、現代社会につながる日本文化や思想を学び、幅広い視野を獲得する。現代も読み継がれる作家が生涯を通して築き上げた文学作品の流れを追うことでその作家の思考過程を検証し、社会への問題意識とその発信の仕方を理解する。また、自分の意見を文章にまとめたり、口頭で発表することができる。						
進め方	配布するプリント資料に基づいた講義形式を中心とする。取り上げる作品の内幾つかの作品については発表形式で読解を行う。また、本科目は学修単位科目であるため、自学自習時間に相当する課題（合計60時間分）の提出を求める。自学自習時間の課題については以下の内容とする。 ・対象作品を事前に読んで授業を受ける。 ・対象作品に関わる課題を提出する。 ・発表形式の作品について発表資料を作成し、授業内に発表する。						
学習内容	学習項目（時間数）			学習到達目標			
	1. 太宰治の文学と生涯(2) 2. 太宰治の描く女性たち (1) 「葉桜と魔笛」を読む(4) (2) 「水仙」を読む(4) (3) 「花火」を読む(5) 3. 太宰治の描く男性たち (1) 「陰火」を読む(4) (2) 「地球図」を読む(4) (3) 「人間失格」を読む(5) 4. 太宰治の自死と太宰文学のその後(2)			・太宰治の作家活動の時期とその当時の日本社会の状況に関わらせて作品内容を理解し、それぞれの作品のテーマを説明できる。 ・太宰治の描く男性と女性、それぞれの特性を捉え、そこから見えてくる社会への問題意識を説明できる。 ・作品に利用された執筆資料の役割を理解し、作品内に留まらない形で読解を深めることができる。 ・作品に対する論理的な読解を適切な日本語で文章にまとめたり、口頭で発表することができる。			
	前期末試験(2)						
評価方法	評価の内訳：自学自習についてはレポート提出により確認する。それも含めて提出物を30%、定期試験を70%とする。						
学習・教育目標との関係	建設環境工学コースの学習・教育目標(A-1)「広い視野」に対応する。						
関連科目	国語Ⅰ（1年）→国語Ⅱ（2年）→国語Ⅲ（3年）→文学特論Ⅰ（4年）→文学作品講読（AS2）						
教材	教科書：太宰治の作品と配布プリント 太宰治の作品 「葉桜と魔笛」（新潮文庫『新樹の言葉』収録）、「水仙」「花火」（新潮文庫『きりぎりす』収録）、「陰火」「地球図」（新潮文庫『晩年』収録）、「人間失格」（新潮文庫『人間失格』収録） 参考書：『太宰治大事典』（勉誠社出版）他						
備考	・本科目の単位は高等専門学校設置基準第17条4項により認定される。1単位当たり45時間の学修により単位認定を行う。						

科目名	技術者倫理 Engineer Ethics			担当教員	山本耕治 (窓口教員：小竹望)		
学年	AS1	学期	前期	科目番号	17162001	単位数	2
分野	工学基礎	授業形式	講義	履修条件	必修得		
学習目標	工学を習得した技術者として、ものづくりにおける心構え（特に安全と品質）をしっかりと自覚する。そして、ものづくりの社会貢献（省エネ、振動騒音公害・メセナ）への関わりについて理解を深めることを目指す。						
進め方	私が過去に実施してきた講演、講義の資料を中心に体験談を交えながら講義を進める。この講義に対する意見を自習時間にまとめ、次の講義で意見交換する。そして、講義終盤に総仕上げとして、実際に設計⇒製図⇒製作⇒破壊試験を実習し、技術者としての心構えを実感する。また、グループ単位での活動において、互いの関わり方より倫理観を高める。						
学習内容	学習項目（時間数）			学習到達目標			
	1. ものづくりの心構え(4) 1)ものづくりの基本 2)自分の役割			研究者、技術者、技能者にとってもものづくりの基本を理解する。			
	2. 研究・開発していく上での必要事項(4) 1)特許 2)文章の書き方 3)プレゼンテーション			特許：テーマを与え全員でアイデア出しをする。文章の書き方、プレゼンテーションは、講演題材をもとに説明し、必要性を理解する。			
	3. 安全と品質(4) 1)KYT訓練の実習 2)製造物責任の事例紹介 3)FTA			KYT訓練は事例を用いて再発防止・対策をグループ単位でディスカッションしまとめてプレゼンする。製造物責任は、事例紹介し、現状を理解する。			
	4. 事例の紹介とディスカッション(2) 1)水道劣化診断システムの開発			産官学共同研究開発で実施したテーマをもとに研究者として（技術者として）どう社会貢献していくのか理解する。			
	5. 厚紙によるクレーンブームの製作実習(14) 1)材料力学の活用方法と理解 2)ものづくりの楽しさ 3)安全設計 4)品質管理 5)省エネ設計 6)グループ内での各自の役割分担 7)技術者としての自覚（責任・自信）			各グループに分けて厚紙によるクレーンブームを製作する。その中で、技術者として必要な材料力学を学ぶ。また、設計・製図・製作・破壊試験の一連の流れの中で、安全・品質・省エネについて考える。具体的に、各グループ単位で製作したクレーンブームについてプレゼンする。最終、破壊試験を実施し、技術者として思い通りの設計ができたか、反省と抱負などをレポートする。			
	6. 社会貢献(2) 8)工学系以外への技術の貢献			高松塚古墳解体支援を通じて、技術者として何が貢献できるのか、説明する。			
評価方法	レポート【プレゼン資料含む】（50%）：提出の有無と内容（自分の言葉で書かれているか） プレゼン力：【アイデア、リーダーシップを含む】（20%）：プレゼンの内容で確認。 破壊試験評価（30%）：順位評価、原因・改善評価のプレゼン・レポートの内容で確認。 総合の60%以上で合格とする。						
学習・教育目標との関係	建設環境工学コースの学習・教育目標(A-1)「広い視野」、(A-2)「技術者倫理」に対応する。 材料力学：社会で活用できるセンスを身につける。 設計・製図安全：わかりやすい設計、だれにも活用してもらえる設計を身につける。 提案・特許・文章。プレゼン：社会貢献している技術力のアピール力を身につける。 グループ活動：折衝力、リーダーシップ、規律、責任、協調、積極、役割を身につける。 技術者倫理：技術者として社会に対する貢献、責任や倫理観について考える力を身につける。						
関連科目	環境化学（4年）、知的財産権（AS1）						
教材	教科書：特になし 参考書：授業の必要に応じて 教材：今までに会社、大学で講義してきたオリジナル教材を使用。						
備考	実習により、技術者としての倫理観・使命観だけでなく、ものづくりの楽しさも学んでほしい。 授業時間以外に、1週に4時間の自主学習の時間が必要である。						

科目名	数学特論 I Topics in Mathematics I			担当教員	中空 大幸		
学 年	AS1	学 期	前期	科目番号	17162002	単位数	2
分 野	工学基礎	授業形式	講義	履修条件	必修得		
学習目標	集合、写像の記号に習熟することから始めて、ベクトル空間、線形写像などの概念と行列による表示との関係を理解し、線形変換の標準化を学習する。						
進め方	教科書に基づいて講義する。適宜、演習問題、レポートを課す。 自学自習時間に相当する課題を毎回出題する。						
学習内容	学習項目 (時間数)			学習到達目標			
	1. 集合と写像 (1) (1) 集合 (2) 写像 2. 連立1次方程式(1) (1) 基本変形 (2) 簡約な行列 (3) 連立1次方程式 3. ベクトル空間 (5) (1) ベクトル空間 (2) 1次独立と1次従属 (3) ベクトル空間の基底と次元 4. 線形写像 (3) (1) 線形写像 (2) 線形写像の表現行列 5. 行列の標準化 (5) (1) 固有値と固有ベクトル (2) 行列の対角化 (3)* Jordan の標準形 (4)* 行列の標準化の応用			・集合、写像の記号に習熟し、写像などを集合の記号を用いて記述できる。 ・連立1次方程式の消去法による解法と解の構造を理解する。 ・ベクトル空間の公理について理解し、具体例について、それらがベクトル空間の構造をもつことを示すことができる。 ・ベクトルの1次独立性、ベクトル空間の基底、次元、部分空間について説明できる。 ・線形写像の定義、線形性を理解し、線形写像に関する基本的な用語(核、像、階数)を理解する。 ・基底による線形写像の行列表示を理解し、次元の低い具体例について求めることができる。 ・固有値と固有ベクトルの概念を理解し、それを用いて、具体的な行列に対して対角化ができる。Jordan の標準形がどのようなものかを理解する。 ・対角化・標準化の基本的な応用が出来る。 ※ *の項目はオプションで、進度などによって適宜取捨選択する			
評価方法	定期試験 80% 演習問題 10% レポート 10% で算出する。 自主学習についてはレポート提出により確認する。						
学習・教育目標との関係	建設環境工学コースの学習・教育目標(B-1)「自然科学の基礎知識」に対応する。						
関連科目	建設応用数学 I (4年) → 建設応用数学 II (5年) → 数学特論 I (AS1)						
教 材	「線形代数学—初歩からジョルダン標準形へ」三宅 敏恒 (著) [培風館]						
備 考	授業時間以外に、1週に4時間の自主学習が必要である。						

科目名	応用物理学 Applied Physics			担当教員	沢田 功		
学年	AS1	学期	前期	科目番号	17162003	単位数	2
分野	工学基礎	授業形式	講義	履修条件	選択		
学習目標	<p>1. 自然界の多彩な現象の奥にある法則性を探るのが物理学である。複雑な自然現象の中から条件を整理し自然界の規則性を発見する道筋を学習できるようになる。</p> <p>2. 理解力や解析力を深め、論理的に物事を考える習慣を身につけることができる。</p> <p>3. 日頃から「何が本当か」「本当はどうなのか」「何故そうなっているか」という観点でものを見て考えることができるようになる。</p> <p>4. 計算を自分で実際に行き理解することができるようになる。</p>						
進め方	身の回りの現象を解析するために、ニュートン力学と解析力学と量子力学を系統的に学習し、物理学的世界像をつかむ。基礎方程式であるニュートンの運動方程式、ラグランジュの方程式やシュレディンガーの方程式がどのようにして発見されたかや、それらの方程式がもつ意味を解説する。課題を通して学習したことを定着させ、理解力・解析力を深める。						
学習内容	学習項目（時間数）			学習到達目標			
	0. ガイダンス (1)			ニュートン力学の基本を理解し、運動量・エネルギー・角運動量の基本的な計算ができる。			
	1. ニュートン力学 (7) 運動の法則、運動量保存の法則、エネルギー保存の法則、角運動量						
	2. 解析力学 I (8) ベクトル解析入門、ラグランジュの方程式			ベクトル演算を使用した解析力学の基本的理論展開を理解し、基本的な応用例を理解する。			
	3. 解析力学 I I (6) 運動の定数、ハミルトンの方程式			解析力学の基本的理論展開を理解し、基本的な計算ができる。			
4. 量子力学 (8) 粒子と波動の二重性、シュレディンガーの方程式			量子力学の初歩を理解し、簡単な実例を説明できる。				
前期試験(2)							
評価方法	<p>1. 評価の内訳は、毎回の日常課題を 30%、定期試験を 70%である。</p> <p>2. 定期試験の点数は、学習内容の 1~4 に対してそれぞれ 25%ずつである。</p>						
学習・教育目標との関係	建設環境工学コースの必修得科目である。 建設環境工学コースの学習・教育目標(B-1)「自然科学の基礎知識」に対応する。						
関連科目	応用物理学(AS1)→現代物理学(AS1)						
教材	参考書：解析力学(大貫義郎, 岩波書店)						
備考	定期試験受験要件：総授業時間の 2/3 以上の出席を要する。 学修単位：授業時間以外に 1 週に 4 (単位数×2) 時間、計 60 時間の自学自習が必要である。						

科目名	現代物理学 Modern Physics			担当教員	野田 数人		
学年	AS1	学期	後期	科目番号	17162004	単位数	2
分野	工学基礎	授業形式	講義	履修条件	選択		
学習目標	<p>1. 現代物理学の基礎である量子力学と統計物理学の基礎事項を学び、物理的な考え方を理解する。</p> <p>2. 量子力学と統計物理学の発展的な内容である超伝導の基礎的な性質を理解する。</p>						
進め方	<p>工学基礎としての量子力学と統計物理学の基礎的な内容についての授業を行う。式の意味や考え方、発見の歴史的な経緯を解説する。また、科学技術への応用例を解説することで理解を促す。基礎知識として本科で習得する微積分・古典力学・電磁気学程度を想定し、その範囲を超える高度な数学は必要に応じて講義の中で説明する。2つの理論を応用した例として、超伝導現象の基礎的な性質について解説する。</p>						
学習内容	学習項目（時間数）			学習到達目標			
	0. ガイダンス（1）						
	1. 量子力学（11） 量子力学の基礎、シュレディンガー方程式、基礎問題、トンネル効果			量子力学の基礎事項を理解し、定性的な理解をしている。一次元の量子力学の典型的な問題を解く計算力が身についている。			
	2. 統計物理学（14） 統計物理学とは、気体分子運動論、ミクロカノニカル分布、エントロピー			統計物理学の基礎事項について、定性的な理解をしている。多数系を扱う数学の計算ができる。典型的な多体系の基礎的な計算ができる。			
	3. 超伝導入門（4） 超伝導とは、基本的性質、応用例			超伝導現象の基本的な性質を定性的に理解し、科学技術への活用例を理解する。			
後期末試験							
評価方法	評価の内訳は、毎回の日常課題を30%、定期試験を70%である。						
学習・教育目標との関係	建設環境工学コースの学習・教育目標(B-1)「自然科学の基礎知識」に対応する。						
関連科目	[応用物理学] (AS1) → [現代物理学] (AS1)						
教材	参考書：初等量子力学（原島鮮、裳華房）、熱・統計力学（戸田盛和、岩波書店）をあげるが、各自が自身にあったものを選ぶことを勧める。						
備考	定期試験受験要件：総授業時間の2/3以上の出席を要する。 学修単位：授業時間以外に、1週に4時間の自主学習が必要である。						

科目名	知的財産権 Intellectual Property Rights			担当教員	関 丈夫		
学 年	AS1	学 期	後期	科目番号	17162005	単位数	2
分 野	工学基礎	授業形式	講義	履修条件	選択		
学習目標	知的財産権制度に関する基礎的知識を習得する。 企業経営や研究活動との関連など、知的財産権の実社会における役割や活用方法を理解する。						
進め方	テキストと配付資料により基礎的知識を解説し、近年の制度改正の動向や関連事案の実例を紹介する。講義内容の復習と理解度確認のため、適宜レポート提出を課す。						
学習内容	学習項目（時間数）			学習到達目標			
	0. ガイダンス (1) 1. 知的財産権の体系 (2) (1) 産業財産権 (特許, 実用新案, 意匠, 商標) (2) その他の知的財産権			産業財産権（特許, 実用新案, 意匠, 商標）をはじめ、その他の関連する権利を加えた知的財産権の全体像を理解している。			
	2. 特許制度(17) (1) 特許制度の目的 (2) 特許要件 (3) 特許を受ける権利と職務発明 (4) 特許出願と明細書 (5) 審査, 審判 (6) 特許権の効力 (7) 特許権の財産性と実施権 (8) 特許発明の技術的範囲 (9) 特許侵害と救済 (10) 外国出願制度 (11) 特許情報の利用			産業財産権のうち技術者・研究者として最も関わりのある特許について、保護対象, 登録手続, 権利の効力, 侵害対応等を理解している。 特許情報の研究開発等への利用方法について、実践的な知識を得ている。			
	3. 実用新案(1) 4. 意匠(1) 5. 商標(1) 6. 不正競争防止法(1) 7. 著作権法(1)			各制度に関する基礎的な知識を理解している。			
	8. 企業経営と知的財産(5) (1) 知的財産部門と企業組織、関連人材 (3) 知的財産と標準化 (4) 知的財産関連契約			企業経営における知的財産の役割や必要とされる関連人材, 標準化との関連を理解している。 技術者・研究者として関わる可能性のある契約の種類・内容について理解している。			
	後期末試験						
	試験返却・解説(1)						
	評価方法	レポート(20%), 期末試験(80%)の総合で評価を行う。					
学習・教育目標との関係	建設環境工学コースの学習・教育目標(A-1)「広い視野」に対応する。 知的財産に関し制度・活用面からの幅広い知識を習得し、技術者として守るべき法令等遵守の重要性を理解する。						
関連科目	技術者倫理(AS1)						
教 材	教科書：渡辺弘司「図解で早わかり 最新版知的財産権のしくみ」三修社 参考書：特許庁 平成28年度知的財産権制度説明会テキスト『知的財産権制度入門』 (特許庁ホームページに掲載)						
備 考	理解を深めるため、予習復習を充分に行うこと。特に、講義内容の理解をよりしっかりとしたものにするため、レポート提出は必ず行うこと。 学修単位：授業時間以外に1週に4(単位数×2)時間、計60時間の自学自習が必要である。						

科目名	工業英語 English for Technical Purpose			担当教員	市川研		
学 年	AS1	学 期	後期	科目番号	17162006	単位数	2
分 野	工学基礎	授業形式	講義	履修条件	選択		
学習目標	<p>1. 科学技術に関する論文を読むために必要な基礎的英語読解力を養う。</p> <p>2. 科学技術に関する論文の特徴や読解方法などを学び、基本的な英語の論文を読めるようになり、論文のアブストラクト程度を書くことができるようになる。</p> <p>3. プレゼンのやり方やレポートの書き方などに慣れる。</p>						
進め方	<p>前半は、マスメディアやインターネットに現れる工学・科学系を中心とした題材の英語文章などの読み方や速読法の習得と、科学的エッセイの精読の訓練を行う。後半は主に、英語論文やアブストラクトでよく使われる文体や表現などの基本的知識を学び、様々な英文を読む演習を行なう。また、自分の興味を持った英文の科学エッセイをレポートにまとめたり、プレゼンをしたりもする。また、自学自習時間に相当する課題を毎回の授業にて出題する。</p>						
学習内容	学習項目 (時間数)			学習到達目標			
	<p>1. 工学分野を中心とした題材の英文の速読(8)</p> <p>1. 章の構造とパターンをつかむ練習(3)</p> <p>2. テーマ (話題) 別の読解練習(2)</p> <p>3. 速読のアクティビティ(2)</p> <p>4. 復習(1)</p> <p>2. 科学的エッセイの精読(7)</p> <p>1. 自然数論や集合論の基礎的な語彙の習得(3)</p> <p>2. エッセイを精読する(4)</p>			<p>図や映像などの助けを借りて、一般読者を対象とした工学的内容の300～500語程度の英文を読み、大意をつかむことができる。</p>			
	<p>プレゼンテーション I, 速読課題 (2)</p> <p>3. 英文の読解(15)</p> <p>1. 文の構造, 文体, 表現の学習(5)</p> <p>2. フレーズ・リーディングの練習(5)</p> <p>3. エッセイの読解(5)</p>			<p>難易度のやや高い英文を読むことができる。エッセイや論文を読むことができる。</p>			
	プレゼンテーション II, レポート課題 I (2)						
評価方法	<p>プレゼンテーション30% (1回15%が2回), レポート課題30%, 授業と課外における取り組み・発言15%, ノート・プリント課題15%, 速読課題10%, で評価する。</p> <p>自習学習については、レポートやプレゼンにて確認をする。</p>						
学習・教育目標との関係	<p>建設環境工学コースの必修得科目である。</p> <p>建設環境工学コースの学習・教育目標(D-3)「基礎的な英語力」に対応する。</p>						
関連科目	工業英語(AS1)						
教 材	英語論文や科学に関するエッセイのハンドアウト等 (教員配布)						
備 考	<p>・ 毎回辞書を持参すること。英和・和英・英英が揃っていることが望ましい。</p> <p>・ 学修単位：授業時間以外に1週に4 (単位数×2) 時間、計 60時間の自学自習が必要である。</p>						

科目名	数学特論Ⅱ Topics in Mathematics II			担当教員	新任教員		
学 年	AS1	学 期	後期	科目番号	17162007	単位数	2
分 野	工業基礎	授業形式	講義	履修条件	選択		
学習目標	正規分布等の確率分布や中心極限定理を利用して確率を計算することができ、簡単な推定や検定ができることなど、確率・統計の基礎を学ぶ。						
進め方	教科書・ノートを用いて講義を行う。基本的な公式や理論について解説し、例題を解説した後、問や章末の問題を演習していく流れで進める。 自学自習時間に相当する課題を適宜出題する。						
学習内容	学習項目（時間数）			学習到達目標			
	1. 確率(8) (0) ガイダンス (1) 確率の定義と性質 (2) いろいろな確率 2. 確率分布(14) (1) 確率変数と確率分布 (2) 統計量と標本分布 3. 推定と検定(8) (1) 母数の推定 (2) 統計的検定			※基本的な確率の計算ができること。 ※二項分布、正規分布などを利用した確率の計算ができること。 ※基本的な条件のもとで、母平均等に関する区間推定や検定ができること。			
	後期末試験						
評価方法	定期試験の成績を90%、レポート点を10%加え100%とする。 自主学習についてはレポート提出により確認する。						
学習・教育目標との関係	建設環境工学コースの学習・教育目標(B-1)「自然科学の基礎知識」に対応する。						
関連科目							
教 材	高遠節夫ほか「新確率統計」大日本図書						
備 考	授業時間以外に、1週に4時間の自主学習が必要である。						

科目名	物理化学 Physical Chemistry			担当教員	橋本 典史		
学 年	AS1	学 期	後期	科目番号	17162008	単位数	2
分 野	工学基礎	授業形式	講義	履修条件	選択		
学習目標	物質変換やエネルギー変換の基本となる一連の熱力学の法則と各種の状態量を学習し、新規の物質合成や新規なエネルギー形態の変換において、その有効性が判断できることを目標とする。						
進め方	配布する資料をもとに、基本となる熱力学の法則と各種の状態量を解説する。また、演習問題を解くことで知識の定着を図る。自学自習時間に相当する課題を毎回出題する。						
学習内容	学習項目 (時間数)			学習到達目標			
	授業説明(1) 1. 熱力学の基礎(3) (1) 理想気体の状態式 (2) 実在気体の状態式 2. 熱力学第1法則(6) (1) 熱力学第1法則 (2) 内部エネルギー (3) エンタルピー (4) 熱容量 (5) 標準生成エンタルピー 3. 熱力学第2法則(8) (1) 熱力学第2法則 (2) エントロピー (3) ギブスエネルギー (4) ヘルムホルツエネルギー (5) 熱力学の基本的関係式 4. 化学ポテンシャル(2) (1) 気体の化学ポテンシャル 5. 相平衡(4) (1) 相平衡 (2) Clapeyron-Clausius の式 6. 化学平衡(2) (1) ギブスエネルギーと平衡定数 7. 電池(4) (1) 電池の起電力とギブスエネルギー変化			1～7. 左記の一連の熱力学の法則と各種の状態量を説明できる。これらを用いて実際の熱力学の問題を解くことができる。			
	後期末試験・試験返却(1)						
評価方法	定期試験(70%)、レポート(15%)、演習課題(15%)。自主学習についてはレポート提出により確認する。						
学習・教育目標との関係	建設環境工学コースの必修得科目である。 建設環境工学コースの学習・教育目標(B-1)「自然科学の基礎知識」に対応する。						
関連科目	物理化学基礎(4年)→物理化学(AS1)、その他に物質・材料を取り扱う専門科目全般						
教 材	教科書：プリントを配布する。必要に応じて参考図書を紹介する。						
備 考	条件によっては再試験を実施することがある。1週に4(単位数×2)時間の自主学習が必要である。						

科目名	分析化学 Analytical Chemistry			担当教員	岡野 寛 橋本 典史		
学年	AS2	学期	前期	科目番号	17162009	単位数	2
分野	工学基礎	授業形式	講義	履修条件	選択		
学習目標	新物質・新材料の開発や新規デバイスの開発に不可欠な材料分析技術について、その原理と分析手法、応用分野を学習するとともに、自らの問題解決の糸口を得ることを目標とする。						
進め方	配布する資料をもとに、基本原理や特徴、応用分野を解説する。また、実際の測定データをもとに、基本的な解析方法を学習する。自学自習時間に相当する課題を毎回出題する。						
学習内容	学習項目（時間数）			学習到達目標			
	授業説明(1) 1. 分析化学の必要性(1) 2. 組成分析技術(5) (1) 蛍光X線分析(XRFS) (2) プラズマ発光分析(ICP) (3) X線マイクロアナライザー(EPMA) (4) 2次イオン質量分析(SIMS) (5) 化学的分析法 3. 状態分析技術(6) (1) X線光電子分光法(XPS) (2) 走査型オージェマイクロスコブ(SAM) 4. 形状・構造解析技術(7) (1) X線回折分析(XRD) (2) 走査型電子顕微鏡(SEM) (3) 透過型電子顕微鏡(TEM) (4) 走査型プローブ顕微鏡(SPM) 5. 有機化合物の分析(10) (1) 赤外吸収スペクトル(IR) (2) 核磁気共鳴スペクトル(^1H NMR) (3) 核磁気共鳴スペクトル(^{13}C NMR) (4) 相関核磁気共鳴スペクトル(COSY・HETCOR) (5) 質量分析法(MS)			2～5. 左記の分析手法の基本原則とそれぞれの長所及び短所を説明できる。必要に応じて、適切な分析手法を選択し、その妥当性について考察できる。			
	前期末試験・試験返却(1)						
評価方法	定期試験(80%)、小テスト(10%)、レポート(10%)。自主学習についてはレポート提出により確認する。						
学習・教育目標との関係	建設環境工学コースの学習・教育目標(B-1)「自然科学の基礎知識」に対応する。						
関連科目	物理化学(AS1)→分析化学、その他に物質・材料を取り扱う専門科目全般						
教材	教科書：プリントを配布する。必要に応じて参考図書を紹介する。						
備考	条件によっては再試験を実施することがある。1週に4(単位数×2)時間の自主学習が必要である。						

科目名	建設工学概論 Introduction to Civil Engineering			担当教員	全教員		
学 年	AS2	学 期	前期	科目番号	17162010	単位数	2
分 野	工学基礎	授業形式	講義	履修条件	選択		
学習目標	<ul style="list-style-type: none"> 建設工学の概要を理解し、建設分野における最新の話題や将来像を理解できる能力を育てる。 レポートの作成等を通してプレゼンテーション能力を育てる。 						
進め方	<ul style="list-style-type: none"> 授業は、プリント、スライドおよびVTR等を用いて進める。 必要に応じて実習や演習を行い、受講者の理解を確かなものとする。 レポート課題を自学自習とし、予習または復習として出題する。 						
学習内容	学習項目（時間数）			学習到達目標			
	1. ガイダンス(1) 授業内容と成績評価方法の説明 2. 建設環境工学概論(29) (1) 建設工学とは (2) 建設材料の話 (3) 鉄筋コンクリートの話 (4) 地盤の話 (5) 防災の話 (6) 河川の話 (7) 海岸・海洋の話 (8) 環境（大気汚染・騒音・振動）の話 (9) 衛生工学の話 (10) 都市計画の話 (11) 交通の話 (12) 施工の話 (13) 建設技術の現状と今後の課題 (14) まとめ			以下の項目ができること。 <ul style="list-style-type: none"> 建設環境工学について、その概要が説明できる。 建設環境工学における各分野の基本的事項が説明できる。 建設環境工学に関する各種の話題について、自らの考えをもち、積極的な提言を行うことができる。 			
評価方法	<ul style="list-style-type: none"> 演習課題に対するレポートの内容を50%、および最終回のまとめの時間における小論文の内容を50%として総合評価する。 総合評価60点以上を合格とする。 						
学習・教育目標との関係	建設環境工学コースの学習・教育目標 (C-1)「課題の遂行」に関する科目であり、平素の取り組みや課題等に対する成果物等で総合的に判断する。						
関連科目	建設環境工学に関する全ての科目						
教 材	必要に応じてプリントを配付する。						
備 考	学修単位：授業時間以外に1週に4（単位数×2）時間、計60時間の自学自習が必要である。 受講希望者が少ない場合は、開講しないことがあるので学務係で確認すること。						

科目名	海外語学研修 Overseas Language Seminar			担当教員	国際交流室員・引率教員		
学年	AS1/AS2	学期	夏季	科目番号	17162011	単位数	1
分野	工学基礎	授業形式	実習	履修条件	選択		
学習目標	海外における英語の学習・体験を通じて、英語によるコミュニケーション能力（スピーキング、リスニング、リーディング、ライティング）の向上を図る。						
進め方	専攻科1年もしくは2年の夏季期間中、ニュージーランド・クライストチャーチ・ポリテクニク工科大学（CPIT）附属語学学校において、1週間あたり22時間の授業を4週間行う。期間中は英語を日常言語とするニュージーランドの家庭に4週間滞在する。						
学習内容	学習項目（時間数）			学習到達目標			
	<p>クライストチャーチ・ポリテクニク工科大学附属語学学校にて設定される授業プログラムによる。その一例を以下に示す。</p> <p>Listening and speaking (20) Grammar (10) Reading (10) Integrated skills development (20) Vocabulary (10) Writing (10) Phrasal verbs and idioms (8)</p>			<p>日常生活の身近な話題について聞いたり、読んだりしたことを理解し、情報や考えなどを簡単な英語で話したり、書いたりして相手に伝える能力を身につける。</p> <p>相手が話すことを理解しようと努めたり、自分が話したいことを相手に伝えようとする姿勢などを、積極的に英語を使って、コミュニケーションを図ろうとする態度を身につける。</p>			
評価方法	クライストチャーチ・ポリテクニク工科大学附属語学学校での評価 80%、実施報告書 15%、および実施報告会 5%の評価を総合して 100点法で評価する。						
学習・教育目標との関係	建設環境工学コースの学習・教育目標(D-3)「基礎的な英語力」に対応する。						
関連科目	本科で履修した英語科目全て、実践英語(AS1)、工業英語(AS1)						
教材	クライストチャーチ・ポリテクニク工科大学附属語学学校						
備考	<ul style="list-style-type: none"> ・本科在籍中に上記語学学校で単位取得している場合は本科目の単位を認定しない。 ・事前に行われる説明会に必ず参加すること。 						

科目名	工学実験・実習 I (建設環境工学コース) Advanced Experiment and Exercises I			担当教員	向谷光彦・多川 正・ 柳川竜一・高橋直己		
学 年	AS1	学 期	前期	科目番号	17163001	単位数	2
分 野	専門	授業形式	実験	履修条件	必修得		
学習目標	1. 実験の基礎理論を理解し、測定値と解析値との比較・検討ができる。 2. 実験結果を分かりやすく報告書にまとめ、説明することができる。 3. 報告書の作成を通じて、自ら学び、考え、それを表現することができる。						
進め方	4つのテーマについて、実験・計測を実施する。実験の「計画」、「準備」、「実施」、「整理」の全ての過程を体験させる。得られた結果はそのつどレポートで提出させる。必要や事情に応じて、実験の他に演習問題やプレゼンテーションを課す。なお4つのテーマの実施順はガイダンス時に決定する。						
学習内容	学習項目 (時間数)			学習到達目標			
	1. ガイダンス (2) 実験テーマの紹介、実施方法レポート提出などの注意			[各テーマ共通] ① 実験の目的を理解し、必要な計画の立案、器材の準備、実験ができる。 ② 得られた結果の検討ができる。 ③ 得られた成果をグラフ化するなどして、報告書にわかりやすく取りまとめることができる (プレゼンテーション含む)。			
	2. 地盤の安定性に関する実験 (28) 地盤の安定性に必要な土質定数の特定、現地調査を実施する。地形情報は測量計測により実施し、CAD や表計算ソフトを活用して地盤の安定性について理解する。			・地盤の土質定数の同定ができる。 ・計測した地盤形状を CAD で描くことができる。			
	3. 波に関する測定実験 (30) 実験水槽を用いた実験と数値解析を行う。2つの結果を比較して、波力について検討するとともに、実験値と理論値の間で生じる誤差の原因などについて検討する。			・波の諸量に関するプログラムの作成ができる。			
	4. 活性汚泥による廃水処理に関する実験 (16) 下水道処理に用いられる、活性汚泥を用いた模擬下水処理実験を行う。処理水質の分析には理化学分析、機器分析を用い、同時に化学分析の基本的な知識について理解する。			・活性汚泥法による基質除去のメカニズムが説明できる。			
5. 高度処理 (14) 高度浄水処理システムに用いられる、活性炭について、その吸着効果を、模擬汚濁水などを用いた浄化実験を行う。			・活性炭の吸着原理、メカニズムについて説明できる。				
評価方法	・各実験での評価の内訳は、レポートの提出状況、上記学習内容の各合格判定基準に沿った内容かどうかを吟味の上、総合して100%として評価する。 ・各実験の重みは、上記項目2と3が34%、4および5がそれぞれ16%である。 ・最終成績は上記重みにより100点満点に換算し、60点以上を合格とする。						
学習・教育目標との関係	建設環境工学コースの学習・教育目標 (C-1)「課題の遂行」、(D-1)「報告書等の作成」、(E-2)「コンピュータ等の有効利用」の3項目に対応する科目である。本科目では、既成実験ではなく実際問題を前提とした内容を含む実験を実施することにより、問題解決への手法を経験する。						
関連科目	工学実験・実習 I → 工学実験・実習 II (AS1)						
教 材	特になし。場合によっては参考図書を示す。参考となるプリントなども配布する。						
備 考	1. 原則として実験には毎回出席すること。 2. レポートを提出期限内に提出すること。 上記1, 2に不足がある場合、単位認定することができないので注意すること。						

科目名	工学実験・実習Ⅱ(建設環境工学コース) Advanced Experiments and Exercises II			担当教員	宮崎耕輔, 林 和彦, 長谷川 雄基		
学年	AS1	学期	後期	科目番号	17163002	単位数	2
分野	専門	授業形式	実験, 実習	履修条件	必修得		
学習目標	<ul style="list-style-type: none"> 建設環境工学の物性・力学特性・非破壊試験野における幾つかの実験テーマや統計処理実習に積極的に取り組むことにより, 主体性や問題解決能力などを涵養する。 実験・実習テーマに関わる基礎理論を理解し, 実験値と計算値との比較検討ができる能力を育成する。 実験・実習結果をまとめ, 報告書作成を通して, 第三者に分り易く情報を伝達する能力を向上させる 						
進め方	<ul style="list-style-type: none"> 担当教員の指導のもと, 提示した実験・実習テーマに取り組む。 実験・実習では, その準備, 試験体作製, 実行, データ整理, 報告書作成のすべてを体験する。 必要に応じて, 参考資料や演習課題の提供を行い, 理解を深める。 						
学習内容	学習項目(時間数)			学習到達目標			
	1. ガイダンス(1) 授業内容と成績評価方法の説明 2. コンクリートの基礎物性試験(19) (1) 配合試験 (2) 圧縮・曲げ・引張・せん断強度試験 3. コンクリートの非破壊試験(10) (1) シュミットハンマーの点検 (2) シュミットハンマーによる反発硬度の計測 4. 統計データの多変量解析(30) (1) 統計データの解析方法 (2) 統計解析モデル (3) 基礎集計 (4) 多変量解析 5. 歩道橋の振動計測(30) (1) 振動理論 (2) 振動計測 (3) 振動解析			全ての学習項目について, 以下のことを行うことができる。 <ul style="list-style-type: none"> 自ら実験・実習の準備, 遂行, 結果の整理を行い, 報告書にまとめることができる。 観測データを正確に整理・分析し, 計算値との比較を行うことができる。 統計データを整理分析し, 考察をすることができる。 口頭や報告書等を通して, 第三者に使用機器, 理論, 結果などについて正確に説明できる。 必要な情報を様々なメディアを通して得ることができる。 (C-1), (D-1), (E-2)			
評価方法	<ul style="list-style-type: none"> 評価は, 各学習項目に対する取り組み, 報告書および演習問題の提出状況と内容を総合して行う。 総合評価 60 点以上を合格とする。 評価の点数は, 実験内容の項目 2 (22%), 3 (12%), 4 (33%), 5 (33%) ずつ評価に入れる。項目 1～3 は長谷川, 項目 4 は宮崎, 項目 5 は林の各教員が担当する。 理由なく 1 回でも欠席した場合は, 単位が認められないことがある。 						
学習・教育目標との関係	建設環境工学コース (C-1)「課題の遂行」, (D-1)「報告書等の作成」, (E-2)「コンピュータ等の有効利用」を達成するための必修得科目である。						
関連科目	建設材料学(3年), 構造力学Ⅰ(3年) → 構造力学Ⅱ(4年), 建設構造設計学(4年), 計画学基礎(4年) → 建設数理計画学(AS1) → 工学実験・実習Ⅱ(AS1)						
教材	必要に応じてプリントを配付する。						
備考	原則として, 報告書の作成はコンピュータ等を有効に利活用して作成すること。						

科目名	特別研究 I (建設環境工学コース) Thesis Research I			担当教員	専攻科担当教員		
学年	AS1	学期	通年	科目番号	17163003	単位数	6
分野	専門	授業形式	実験	履修条件	必修得		
学習目標	<ul style="list-style-type: none"> 自発的な研究を遂行し、より広い知識と応用力を身につける。 研究を深めることによって、さらに高度な問題解決能力や創造力を育成する。 学会などの講演会のほか、各種発表会への論文投稿および口頭発表を通して、文章力やコミュニケーション能力を高める。 						
進め方	<ul style="list-style-type: none"> 指導教員（主査）の指導のもと、選定した研究課題について実施計画の立案から最終報告までのすべての過程について自主的に遂行する。授業時間のみならず時間外をも含めて真剣に研究に取り組み、自立した技術者としての素養を身につける。 特別研究 I 発表審査会、学協会での発表会等への参加を通して、第三者への意志伝達能力を向上させる。 学会への論文投稿または学会での口頭発表を義務付けているので、本研究の1つの目標として積極的に取り組む。 副査（関連の深い分野の教員や有識者2名）からも積極的かつ自主的に指導を仰ぎ、研究内容を充実するように努力する。 						
学習内容	学習項目（時間数）			学習到達目標			
	1. ガイダンス(1) 授業内容と成績評価方法の説明 2. 特別研究 I の実施 (AS1:270 時間) (1) 情報収集 (2) 研究の計画立案, 遂行, および結果の整理 (3) 学内外での研究発表 (4) 論文概要集の作成 (5) 卒業研究生の指導・助言			以下の各項目が実施できること。 ・必要な情報を様々なメディアを通して得ることができる。 ・自ら研究計画の立案, 遂行, 結果の整理を行うことができる。 ・関係資料やデータを正確に分析し, これを盛り込んだ研究論文を作成できる。 ・適切なメディアと資料により, 第三者に対して明確に情報を伝達できる。 ・本科卒業研究生に対して的確な指導・助言ができる。			
評価方法	成績評価は、日常の取り組み、論文概要集および特別研究 I 発表審査会での審査結果に基づき決定する。発表内容、論文の内容、学外での発表状況等を総合的に評価して判定する。 1) 主査（指導教員）による1年間の総合的な評価 50点 2) 副査（関連の深い分野の教員や有識者2名）2名による総合的な評価 30点 3) 特別研究 I 発表審査会における審査員団による評価 20点						
学習・教育目標との関係	建設環境工学コースの学習・教育目標 (C-2)「特別研究の遂行」を平素の取り組みと研究の達成度によって評価する。(45%) (D-1)「報告書等の作成」を論文概要集によって評価する。(20%) (D-2)「口頭発表と質疑応答」を特別研究 I 発表審査会によって評価する。(20%) (E-2)「コンピュータ等の有効利用」を論文概要集によって評価する。(15%)						
関連科目	建設環境工学科で学ぶ全ての科目						
教材	必要に応じて提示する。						
備考							

科目名	特別研究Ⅱ（建設環境工学コース） Thesis Research Ⅱ			担当教員	専攻科担当教員		
学年	AS2	学期	通年	科目番号	17163005	単位数	10
分野	専門	授業形式	実験	履修条件	必修得		
学習目標	<ul style="list-style-type: none"> ・ 自発的な研究を遂行し、より広い知識と応用力を身につける。 ・ 研究を深めることによって、さらに高度な問題解決能力や創造力を育成する。 ・ 学会などの講演会のほか、各種発表会への論文投稿および口頭発表を通して、文章力やコミュニケーション能力を高める。 						
進め方	<ul style="list-style-type: none"> ・ 指導教員（主査）の指導のもと、選定した研究課題について実施計画の立案から最終報告までのすべての過程について自主的に遂行する。授業時間のみならず時間外をも含めて真剣に研究に取り組み、自立した技術者としての素養を身につける。 ・ 特別研究Ⅱ発表審査会、学協会での発表会等への参加を通して、第三者への意志伝達能力を向上させる。 ・ 学会への論文投稿または学会での口頭発表を義務付けているので、本研究の1つの目標として積極的に取り組む。 ・ 副査（関連の深い分野の教員や有識者2名）からも積極的かつ自主的に指導を仰ぎ、研究内容をより充実したものにするよう努力する。 						
学習内容	学習項目（時間数）			学習到達目標			
	1. ガイダンス(1) 授業内容と成績評価方法の説明 2. 特別研究Ⅱの実施（AS2:450時間） (1) 情報収集 (2) 研究の計画立案，遂行，および結果の整理 (3) 学内外での研究発表 (4) 論文概要集および特別研究論文の作成 (5) 卒業研究生の指導・助言			以下の各項目が実施できること。 ・ 必要な情報を様々なメディアを通して得ることができる。 ・ 自ら研究計画の立案，遂行，結果の整理をおこなうことができる。 ・ 関係資料やデータを正確に分析し，これを盛り込んだ研究論文を作成できる。 ・ 適切なメディアと資料により，第三者に対して明確に情報を伝達できる。 ・ 本科卒業研究生に対して的確な指導・助言ができる。			
評価方法	成績評価は，日常の取り組み，特別研究論文，論文概要集および特別研究Ⅱ発表審査会での審査結果に基づき決定する。発表内容，論文の内容，学外での発表状況等を総合的に評価して判定する。 <ul style="list-style-type: none"> 1) 主査（指導教員）による1年間の総合的な評価 50点 2) 副査（関連の深い分野の教員や有識者2名）2名による総合的な評価 30点 3) 特別研究Ⅱ発表審査会における審査員団による評価 20点 						
学習・教育目標との関係	建設環境工学コースの学習・教育目標 (C-2)「卒業・特別研究の遂行」を平素の取り組みと研究の達成度によって評価する。(45%) (D-1)「報告書等の作成」を特別研究論文および論文概要集によって評価する。(17%) (D-2)「口頭発表と質疑応答」を特別研究Ⅱ発表審査会によって評価する。(20%) (D-3)「基礎的な英語力」を特別研究論文のアブストラクトによって評価する。(3%) (E-2)「コンピュータ等の有効利用」を特別研究論文および論文概要集によって評価する。(15%)						
関連科目	建設環境工学科で学ぶ全ての科目						
教材	必要に応じて提示する。						
備考							

科目名	インターンシップⅠ, Ⅱ, Ⅲ, Ⅳ Internships			担当教員	創造工学専攻長		
学年	AS1, AS2	学期	通年	科目番号	17163008~11	単位数	1, 2, 4, 6
分野	専門	授業形式	実習	履修条件	選択		
学習目標	実社会において、将来のキャリアに関連した就業体験を得ることにより、技術者としての心構え、考え方、行動のあり方などを学び、学内における勉学・研究活動や将来の進路選択・就業に活かすことを目的とする。						
進め方	<p>民間企業、官公庁、あるいは大学の研究室などの実習先を決定した上で、夏季休業中やその他の時間を利用し、1週間以上の期間にわたり実習を行う。期間に応じて次の4種とする。</p> <p>(1)インターンシップⅠ (45時間以上; 1単位) (2)インターンシップⅡ (90時間以上; 2単位) (3)インターンシップⅢ (180時間以上; 4単位) (4)インターンシップⅣ (270時間以上; 6単位)</p> <p>時期は在学中の2年間とし、学年、学期は限定せず、連続した日程でなくても、また年度をまたがっても可とする。計画時(または完了時)の合計時間数に応じてインターンシップⅠ, Ⅱ, ⅢまたはⅣとする。</p>						
学習内容	学習項目(時間数)			学習到達目標			
	実習受け入れ先の実習教育担当者の計画・指導に従う。			<ul style="list-style-type: none"> 設定された実習内容を理解し、具体的かつ明確に内容を説明できる。 与えられた任務に対し責任を持って遂行できる。 			
実習終了後、所定の書式により実習報告書を提出する。さらに報告会において実習内容、実習で挙げた具体的成果、活動全体を通して得られた有意義な点および反省点、今後の活動に与える影響などを分かりやすく報告する。			<ul style="list-style-type: none"> 実習内容を明確に説明できる。 実習を通して、受け入れ先に対して行った貢献、自己の挙げた成果等を詳細に説明できる。 実習活動全体において、有意義な点、あるいは反省点などを分析して説明できる。 実習を終えた結果、今後の自分の意識あるいは活動にどのように影響を与えるかを説明できる。 				
評価方法	実習報告書および実習報告会の結果をもとに各コースの複数の教員が評価する。						
学習・教育目標との関係	<p>建設環境工学コースの学習・教育目標との関連</p> <p>(C-1) 課題に対して自発的に取り組み、創意工夫できる力を身につける。(課題の遂行)</p> <p>(D-1) 課題に対する成果について、報告書、概要集原稿、論文集原稿などの形でまとめることができる。(報告書等の作成)</p> <p>(D-2) 課題に対する成果を研究室内、研究発表会、学術講演会などで口頭発表し、質問に対して対応できる。(口頭発表と質疑応答)</p>						
関連科目	特になし						
教材							
備考	上の進め方で、1時間は50分と計算する。そのため、企業等からのインターンシップ証明書の実働時間 $\times(60/50) \geq 45$ ならインターンシップⅠに必要な実働時間として認定可能となる。例えば、1日8時間で5日間の場合、実働 $40 \times (60/50) = 48 \geq 45$ であり、インターンシップⅠに必要な時間を満たしている。同様にインターンシップⅡなら、実働時間 $\times(60/50) \geq 90$ と計算する。						

科目名	耐震設計学 Seismic Design			担当教員	林 和彦		
学 年	AS1	学 期	前期	科目番号	17163040	単位数	2
分 野	専門	授業形式	講義	履修条件	選択		
学習目標	<ul style="list-style-type: none"> 一質点系粘性減衰型振動モデルについて、含まれる各特性値が説明でき、理論式が導ける。 震度法の考え方が理解でき、実際に簡単な演習問題が解ける。 各種時刻歴応答解析法の考え方が理解できる。 各種応答スペクトルの考え方が理解でき、それを文章と図とを用いて説明できる。 道路橋示方書（耐震設計編）の条文を通して、性能照査型設計法の考え方が理解できる。 						
進め方	講義形式で授業を進める。 適宜、レポート課題を出し、最後に耐震設計法に関する演習課題を実施する。						
学習内容	学習項目（時間数）			合格判定水準			
	1. ガイダンス(1) 授業内容と成績評価方法の説明 2. 一質点系バネモデル(11) (1) 土木構造物の1質点系バネモデル化 (2) 自由振動の運動方程式 (3) 強制振動の運動方程式			<ul style="list-style-type: none"> 一質点系粘性減衰バネモデルに含まれる各特性値の説明ができる。 一質点系粘性減衰バネモデルの運動方程式およびその解が導ける。 			
	後期中間試験						
	3. 時刻歴応答解析法(10) (1) 各種時刻歴応答解析法 (2) 震度法 (3) 応答スペクトル 4. 鉄筋コンクリート橋脚の耐震設計法(8) (1) 性能照査型設計の考え方 (2) 曲げモーメントー曲率関係 (3) 水平力ー水平変位関係 (4) 安全性の照査法			<ul style="list-style-type: none"> 震度法の考え方が説明でき、実際に設計ができる。 各種応答スペクトルの意味が文章と図とを用いて説明できる。 RC 橋脚の性能照査型設計法の考え方が説明できる。 RC 橋脚断面の曲げ耐力の求め方が図と文章とを用いて説明できる。 			
	後期末試験						
評価方法	<ul style="list-style-type: none"> 試験の成績は、定期試験を80%、レポートを20%として評価する。 自主学習についてはレポート提出により確認する。 						
学習・教育目標との関係	建設環境工学コースの必修得科目である。 建設環境工学コースの学習・教育目標(B-2)「土木工学の基礎知識」、(E-1)「設計力」に対応する。						
関連科目	構造力学Ⅰ、Ⅱ(3,4年)→建設構造設計学(4年)→構造工学(5年)→耐震設計学(AS1年) →コンピュータ構造解析(AS2年)						
教 材	山田均・米田昌裕：応用振動学(改訂版)、コロナ社(ISBN:978-4-339-05551-1)						
備 考	学修単位：授業時間以外に1週に4(単位数×2)時間、計60時間の自学自習が必要である。						

科目名	環境防災工学 I Prevention of Natural Disasters I			担当教員	小竹 望		
学 年	AS1	学 期	前期	科目番号	17163041	単位数	2
分 野	専門	授業形式	講義	履修条件	選択		
学習目標	<ul style="list-style-type: none"> ・自然災害に関する一般的な知識を身につけ防災方法を理解する。 ・地盤工学分野における地震に関する工学的知識を身につけ、地震防災を理解する。 ・土質力学の基礎を理解し、地盤振動の理論的な基礎事項を理解する。 ・災害と防災に関わる個別課題に対するレポートを作成し、文章とプレゼンテーションにより説明できる。 						
進め方	<ul style="list-style-type: none"> ・地震防災に関連する地盤振動と土質力学の基礎について講義により学習する。 ・自然災害全般ならびに地震災害と防災について、個々の課題を分担してレポートを作成し、2～3回のプレゼンテーションを行う。 						
学習内容	学習項目（時間数）			学習到達目標			
	1. はじめに(2) 授業内容と成績評価方法のガイダンス			<ul style="list-style-type: none"> ・自然災害に関する基礎知識を身につけ、防災方法が理解できる。 ・学習テーマに沿ったレポートが作成でき、分かりやすいプレゼンテーションができる。 			
	2. 自然災害と防災(6) (1) 自然災害の種類と特徴 (3) 各種自然災害と防災の現状 (4) 個別テーマのレポート作成とプレゼンテーション						
	3. 地震災害と防災(6) (1) 地震発生のメカニズムと地震波 (2) 地震発生子測の現状と課題 (3) 地震災害の種類と特徴 (4) 各種地震災害と防災の現状 (5) 個人テーマのレポート作成とプレゼンテーション						
	4. 地盤振動の基礎(16) (1) 入力地震波と地盤振動 (2) 土の動的性質 (3) 重複反射理論 (4) 地盤応答解析(時刻歴と周波数応答)						
	前期末試験			<ul style="list-style-type: none"> ・地震に関する基礎知識を身につけ、地震防災が理解できる。 ・学習テーマに沿ったレポートが作成でき、分かりやすいプレゼンテーションができる。 			
試験返却(1)							
評価方法	個人テーマのレポートの内容、提出状況、プレゼンテーションを50%、期末試験を50%として評価し、総合で60%以上を合格とする。						
学習・教育目標との関係	建設環境工学コースの必修得科目である。 建設環境工学コースの学習・教育目標(B-2)「土木工学の基礎知識」、(E-1)「設計力」に対応する科目である。本科目では、自然災害（地震災害も含まれる）のメカニズムやその対策に関連する基礎知識を習得し、土木構造物の総合的な設計能力に要求される基礎を身につける。						
関連科目	防災工学基礎・土の力学(4年)→地域防災学・地盤工学(5年) →環境防災工学 I (AS1)→環境防災工学 II (AS2)						
教材	適宜プリント等を配布する。						
備考	自学自習時間（平均4時間/週、計60時間）に個人テーマのレポートとプレゼンテーションを用意する。						

科目名	流体力学特論 Advanced Fluid Dynamics			担当教員	柳川 竜一		
学 年	AS1	学 期	前期	科目番号	17163042	単位数	2
分 野	専門	授業形式	講義	履修条件	選択		
学習目標	流体力学の基礎的知識であるオイラーの連続の式と運動方程式，体の変形，回転について理解し，開水路の不定流問題等について理解を深める。						
進め方	教科書を中心とした講義が基本であるが，各項目毎に設計手法の基本的な考え方と理論について解説した後，内容を深めるため，演習問題を随時取り入れて行う。 授業開始までに予め教員が提示した実施範囲と配付資料の内容を確認・予習しておくこと。						
学習内容	学習項目（時間数）			学習到達目標			
	1. はじめに(6) (1) 流体力学のガイダンス (2) 基礎方程式の復習 (静止流体力学，運動方程式) 2. 流体力学の基礎理論(8) (1) 流体運動の調べ方 (オイラーとラグランジュ) (2) オイラーの連続の式（流れ方向） (3) オイラーの運動方程式（流れ方向）			<ul style="list-style-type: none"> 流体力学の基礎方程式が理解でき，説明することができる。 静止流体についての力学的な説明ができる。 オイラーの連続の式と運動方程式が導ける。 流体の扱いについて，ラグランジュ・オイラーの手法の違いについての説明ができる。 (B-2) 			
	[前期中間試験]						
	3. 開水路不定流(8) (1) 開水路定流 (基礎方程式，掃流力，水面系の計算) (2) 開水路不定流の基礎方程式 (連続の式と運動方程式) (3) 洪水波 (4) 段波 4. 流体力学の初歩(6) (1) 変形と回転 (2) 渦無し流れ			<ul style="list-style-type: none"> 開水路の不定流の連続の式と運動方程式を導くことができる。 洪水波の速度の計算方法を理解する。 段波の計算ができる。 流体の変形について理解する。 渦が無い状態での流れについて説明ができる。 (B-2) 			
前期末試験							
評価方法	<ul style="list-style-type: none"> 成績は，通常演習・課題への取組みを20%，定期試験を80%として評価する。 2回の定期試験の重み付けはそれぞれ50%として評価する。 課題の提出遅れは減点対象となる（提出遅れは最大で60%，未提出は0%の評価）。また，課題については採点し，その結果を踏まえて評価することがある。 学習項目の重みは，1～4それぞれについて20%，30%，35%，15%とする。 						
学習・教育目標との関係	建設環境工学コースの学習・教育目標；(B)「科学技術の基礎知識と応用力」（知識）の中の(B-2)「土木工学の基礎知識」の項目について充実させる科目である。						
関連科目	水理学（4年）→ 河川水文学・海岸工学（5年）→ 流体力学特論（AS1）						
教 材	教科書：川崎浩司 著 沿岸域工学[ISBN978-4-339-05630-3]コロナ社（持ち上がり），プリント						
備 考	学修単位：授業時間以外に，1週に4(単位数×2)時間の自主学習が必要である。						

科目名	建設数理計画学 Civil Mathematical Planning			担当教員	宮崎 耕輔		
学年	AS1	学期	前期	科目番号	17163043	単位数	2
分野	専門	授業形式	講義, 演習	履修条件	選択		
学習目標	数理計画学の基礎を理解し, 建設分野におけるデータ取り扱い, 統計処理, 分析に関する数学的知識を理解できる能力を養う。また, 平常授業(演習・レポートを含む)に対する真摯な取り組み態度を涵養する。						
進め方	授業内容は必要最小限の項目にとどめる。授業内容の理解を助けたり深めたりするために, 必要に応じて演習や平常テストを実施し, その理解度・修得度を確認しながら授業を進め, 全員が授業内容を理解できるよう配慮する。 本科目は学修単位であるため, 自学自習時間に相当する課題を毎回出題する。						
学習内容	学習項目 (時間数)			学習到達目標			
	1. はじめに(1) (本科目の位置づけ、授業内容と成績評価方法) 2. 確率と確率分布(7) (1) 確率と確率分布 (2) 二項分布 (3) ポアソン分布 (4) 正規分布 (5) 対数正規分布と指数分布 (6) 正規分布から派生する重要な分布			<ul style="list-style-type: none"> 確率密度関数と確率分布関数について理解している。 確率分布の種類と特性について説明できる。 特性値(平均, 分散, モーメント)について理解している。 二項分布, ポアソン分布, 正規分布(和・差の分布) 同時確率密度関数について理解している。 (B-1)「自然科学の基礎知識」に関連する科目である。			
	[前期中間試験]						
	3. 推定(3) (1) 統計的有意性 (2) 母平均の推定 (3) X二乗分布と母標準偏差の推定 (4) 母比率の推定 4. 検定(4) (1) 統計的仮説検定の考え方 (2) 母平均に関する仮説検定			<ul style="list-style-type: none"> 統計的推定法(積率法, 最尤法), 統計的区間推定法を理解している。 統計的仮説検定について理解している。 (B-1)「自然科学の基礎知識」に関連する科目である。			
評価方法	<ul style="list-style-type: none"> 学習項目の全体評価への重みは, 2を100%とする。 試験の成績は, 定期試験を90%(90点), 平素の取り組みを10%(10点)として評価する。 平素の取り組みは, 課題の提出状況とそれに関連した内容の定期試験での定着度をもとに評価する。 授業のはじめに小テストを実施することがある。また進度によって, 中間試験を設定することがある。授業時に通達する。 						
学習・教育目標との関係	(B-1)「自然科学の基礎知識」に関連する科目である。						
関連科目	数学(本科1~3年) → 計画学基礎(本科4年) → 地域整備学(本科5年)						
教材	参考書: 鳥居泰彦(1994): はじめての統計学, 日本経済新聞社 飯田恭敬(1991): 土木計画システム分析, 森北出版 加藤晃(1981): 土木計画学のためのデータ解析法, 共立出版 亀田弘行他(2005): 確率・統計解析, 技報堂出版						
備考	前期中間試験は, 演習の一環として, 授業中に実施することがある。 学修単位(授業時間以外に, 1週に4(単位数×2)時間の自主学習が必要である)						

科目名	社会基盤計画学 Infrastructure Planning			担当教員	今岡 芳子		
学年	AS1	学期	後期	科目番号	17163044	単位数	2
分野	専門	授業形式	講義	履修条件	選択		
学習目標	人々の生活と社会活動，産業経済活動の基盤となる，生活基盤施設や産業基盤施設，自然基盤施設といった，社会基盤施設の計画・整備・運用に際して必要となる調査，分析，評価の手法について学び，地域の変化や現状を把握する。さらに発表やグループ討議など通じて，課題に対する対応策を自分の意見として提案し，課題解決のための判断能力を高めることを目的とする。						
進め方	身近な地域を対象とし，分析する地域と社会基盤施設を各自が設定する。 分析対象地域の，自然現象や社会経済に関連する資料やデータを収集し，対象地域の課題を抽出し，解決すべき課題の決定を行う。統計分析やGISを用いて，課題に対して対応できる社会基盤施設の計画・整備・運用について検討し，さらにグループ討議などをしながら意見の合意形成方法を身に付ける。次回授業までに，学んだ内容に沿って自らが設定した課題に対する復習をノートにまとめ報告する。						
学習内容	学習項目（時間数）			学習到達目標			
	1. 授業ガイダンス(1) ・本科目の位置づけ，授業内容と成績評価方法について ・分析地域・社会基盤施設の設定						
	2. データの入力と課題抽出(8) ・自然現象調査や社会経済調査に関する資料やデータを収集・整理を行い，整理したデータから地域の課題を抽出する。			・事象と現象の観測について理解している。			
	3. 統計分析とGISによる地域環境評価(16) ・社会基盤施設の計画・整備・運用に関するデータの分析と評価について学ぶ。 ・基本的な統計的処理と分析方法を用いて，地域分析や予測を行う。 ・GISなどを用いて，情報の可視化や空間分析をし，時系列の変化を見る。			・人口と社会経済指標（計画フレーム）を理解し，その推計ができる。 ・時系列データの予測について理解している。			
	4. 発表とグループ討議(4) ・これまで分析を行っていた情報をまとめ，プレゼンテーションをする。 ・周りの意見を聞き，課題について再度検討する。			・ブレーンストーミング・ライティングについて理解している。			
	後期末試験						
評価方法	成績の評価は定期試験を80%，演習課題への取り組みを20%で評価する。 各項目1～4の重みは，0%，30%，40%，30%とする。 なお，試験をレポート・発表に替え評価する場合もある。自主学習については，毎回行った内容ノートにまとめを報告し，最終の授業時に提出し確認する。						
学習・教育目標との関係	本科目は，「建設環境工学コース」の学習・教育目標のうち，(B-2)「土木工学の専門知識」，(E-1)「設計力」の科目である。						
関連科目	計画学基礎（4年）→地域整備学（5年）→社会基盤計画学（AS1）						
教材	適宜，プリントを配布する。 参考書：樗木 武：土木計画学 第3版 ISBN978-4-627-42713-6						
備考	学修単位：授業時間以外に1週に4（単位数×2）時間，計60時間の自学自習が必要である。						

科目名	耐久設計学 Durability Design			担当教員	中川 裕之 (窓口教員：林 和彦)		
学 年	AS1	学 期	後期	科目番号	17163045	単位数	2
分 野	専門	授業形式	講義	履修条件	選択		
学習目標	1. 与えられた教材に対する輪講を通して、自己学習能力や発表能力を涵養する。 2. 将来適用が予想されるライフサイクルコストを考慮した新しい設計法を学習する。 3. 実際の設計例について、その耐久性を検討する。 4. メンテナンスの基本的な考え方、劣化予測や補修補強の方法などについて学習する。						
進め方	各人に分担箇所を説明してもらいながら、必要に応じて関連事項を詳しく説明する。また、スライドやビデオなども利用して関連事項を掘り下げて学習する。担当箇所の説明準備を自学自習に相当する時間数をかけて授業目までに各自準備し、作成したパワーポイントのファイルを提出する						
学習内容	学習項目（時間数）			合格判定水準			
	1. 土木学会におけるコンクリート構造物の耐久設計法 (18) (1) ガイダンス (2) 耐久性の考え方 (3) 環境指数と耐久指数 (4) 耐久性ポイント (5) 実際の設計例に対する耐久性の検討			土木学会における耐久設計の考え方について説明ができ、これを実構造物に適用して耐久性の評価ができる。 (B-2), (E-1)			
	2. 土木構造物のメンテナンスの基本 (12) (1) メンテナンスの現状と課題 (2) 構造物の機能・性能とメンテナンスの基本 (3) 構造物の劣化 (4) 構造物の点検方法 (5) 劣化予測・評価の方法 (6) 補修・補強の方法			構造物の維持管理の現状を把握し、メンテナンスの基本的な考え方、点検方法と劣化要因ごとの予測・評価方法および補修や補強の方法について説明できる。 (B-2), (E-1)			
	後期末試験						
評価方法	・評価の内訳は、輪講時の説明 30%、定期試験を 70%として評価する。 ・学習内容の重みは、項目 1 を 60%、項目 2 を 40%とする。 ・自学自習については提出された発表用パワーポイントにより確認する。						
学習・教育目標との関係	建設環境工学コースの必修得科目である。 建設環境工学コースの学習・教育目標(B-2)「土木工学の基礎知識」、(E-1)「設計力」に対応する。						
関連科目	建設材料学 (3年) → 建設構造設計学 (4年), 建設工法学 (4年) → 耐震設計学 (AS1)						
教 材	プリント, ビデオ等を使用する。						
備 考	建設材料学, 建設構造設計学と関連する事項が多いので, これとも併せて復習する。 輪講を通して, プレゼンテーション能力を十分に涵養する。 学修単位: 授業時間以外に1週に4(単位数×2)時間, 計60(4×15週)時間の自学自習が必要。						

科目名	連続体力学 Continuum Mechanics			担当教員	小竹 望		
学 年	AS1	学 期	後期	科目番号	17163046	単位数	2
分 野	専門	授業形式	講義	履修条件	選択		
学習目標	1. 構造力学の基本事項について、英語テキストを用いた学習を通じて理解する。 2. 連続体力学の基礎となる応力ひずみの概念を英語で理解できる。 3. 既習の構造力学で学習した部材要素の変形量や断面力の計算方法を英語で理解できる。						
進め方	・テキストの読解により技術英語の表現のポイントを確認しながら理解する。 ・個々の分担テーマを学生が解説し、問題点についてディスカッションする。 (プロジェクター使用, レジユメ配布など, 各自の説明方法に応じて工夫する)						
学習内容	学習項目 (時間数)			学習到達目標			
	1. Orientation (2) 2. Fundamentals for Technical English (4) Numbers, Equations and Figures 3. Equilibrium of Forces (4) Force, Moment, and Equilibrium Conditions 4. Statically Determinate Beams (4) 5. Influence Lines (2) Maximum and Absolute Maximum Value 6. Stress and Strain (2) Hooke's Law, Poisson's Ratio and Shear Strain and Shear Stress 7. Stresses in Beams (2) Bending of an Elastic Beam, Total Stress and Shear Stresses 8. Deflection of Beams (2) Differential Equation of the Elastic Curve 9. Columns (2) Short Columns and Long Columns 10. Generalized stress-strain relations (4) 11. Summary (2)			・基本的な数・数式・図形の英語表現が理解できる。 ・連続体力学に関わる以下の項目が英語で理解できる。 ・力, モーメントの定義, 力のつり合い条件 ・静定梁 外力, 支点反力, 断面力 単純梁, 片持ち梁, 張出し梁, ゲルバー梁 ・静定梁の影響線と利用方法 ・弾性体の応力ひずみ関係 ・梁のたわみ 微分方程式による解法 ・短柱の応力度と長柱座屈荷重の評価 ・一般化した応力ひずみ関係 ・英語で表現された基本問題を解くことができる。			
	後期末試験						
	試験返却(1)						
評価方法	授業への取り組み実績を 50%, 定期試験結果を 50%として評価し, 総合で 60%以上を合格とする。						
学習・教育目標との関係	建設環境工学コースの学習・教育目標 (B-2)「土木工学の基礎知識」に関連する力学の基礎を身につけるとともに, 英語のテキストを使用して輪講形式で授業を進めることにより (D-3)「基礎的な英語力」を身につけることを目的とした教科である。						
関連科目	構造力学 I (3年)・構造力学 II (4年) → 構造工学 (5年) → 連続体力学 (AS1)						
教 材	配布資料						
備 考	・授業時間内で理解できるように集中力が要求される。 ・発表者は周到な用意が求められる(3回程度/人)。 ・学修単位のため自学自習時間(平均4時間/週、計60時間)に相当する予復習を課す。						

科目名	情報システム Information Technology and Systems			担当教員	向谷 光彦		
学年	AS1	学期	後期	科目番号	17163047	単位数	2
分野	専門	授業形式	講義	履修条件	選択		
学習目標	データの性質とその情報処理の目的を正しく理解して、適切な解析方法を選択することができ、その結果に対する工学的判断ができる能力を涵養する。また、平常授業（演習・レポートを含む）に対する真摯な取り組み態度を涵養する。						
進め方	授業内容は必要最小限の項目にとどめる。授業内容の理解を助けたり深めたりするために必要に応じて演習や平常テストを実施し、その理解度・習得度を確認しながら授業を進め、全員が授業内容を理解できるよう配慮する。						
学習内容	学習項目（時間数）			学習到達目標			
	1. はじめに(1) (本科目の位置付け、授業内容と成績評価方法、情報端末使用に関する倫理観) 2. 斜面災害危険地域の安定性評価(13) (1) 斜面災害の概要 (急傾斜地、地すべり、落石危険地域) (2) 斜面災害危険地域の地形、地質情報の収集 (3) 収集データによる斜面形状の図化および安定解析 (4) 各種斜面危険度評価への適合性検討			①斜面災害と危険度評価法の基礎が説明できる。 ②地形、地質情報の収集、データベース化ができる。			
	[後期中間試験]						
	3. CADシステムによる地域環境の把握(14) (1) CADシステムの概要 (2) データの基礎 (構造、記述、表現) (3) データの利用 (計画、資源、調査、マーケティング) (4) 地域環境問題 (地盤、水、大気、インフラ、管理)			③CADシステムの基礎が説明できる。 ④データの構造と利用法の基礎が説明できる。			
	後期末試験						
評価方法	<ul style="list-style-type: none"> ・①～④を同じ重み（それぞれ25%程度）とする。 ・なお、中間、期末試験は課題作成（レポート）を実施する。自主学習についてはレポート提出により確認する。 						
学習・教育目標との関係	建設環境工学コース；(B-2) →CADについては、より高度の階級受験も視野に入れて欲しい。 →情報収集のためのインターネット使用のルールやマナー、および基礎知識に関する外部検定試験等を紹介するので、キャリアアップの機会として援用して欲しい。						
関連科目	情報処理工学、測量学Ⅲ（5年） → 情報システム、環境計測学、環境防災工学Ⅰ,Ⅱ → コンピュータ構造解析						
教材	参考書：Obura Clib 著；やさしく学ぶ J w _ c a d（エクスマレッジ）						
備考	学修単位：授業時間以外に1週に4（単位数×2）時間、計60時間の自学自習が必要である。						

科目名	建設工学演習 Introduction to Civil Engineering			担当教員	全教員		
学年	AS1	学期	通年	科目番号	17163048	単位数	2
分野	専門	授業形式	演習	履修条件	選択		
学習目標	<ul style="list-style-type: none"> 建設環境工学における基本的かつ重要な事項について基本的な知識を有し、それらを実際の問題や各種資格試験に応用できる能力を身につける。 レポートの作成に必要な文章理解、資料解釈、作文等の作成能力を身に付ける。 						
進め方	<ul style="list-style-type: none"> 建設環境工学の各分野における基礎事項を解説した後、演習問題および自習を通してその理解を深める。 文章理解、資料解釈、作文等の作成の訓練を行い、レポート作成能力の向上を図る。 						
学習内容	学習項目（時間数）			学習到達目標			
	1. ガイダンス(1) 授業内容と成績評価方法の説明 2. 建設環境工学の各分野における演習(59) (1) 構造力学分野 (2) 材料工学の分野 (2) 地盤工学の分野 (3) 水理学の分野 (4) 都市・交通計画の分野 (5) 河川・海岸・海洋の分野 (6) 衛生工学の分野 (7) 環境（地域環境・地球環境）の分野 (10) 数学・数的処理 (11) 文章解釈・資料解釈 (12) 小論文作成			以下の項目ができること。 <ul style="list-style-type: none"> 各学習項目について、基本的事項を理解し、それらについて説明できる。 各学習項目に関連した基本問題および応用問題を解くことができる。 各学習項目の関連資料やデータを正確に分析し、その報告書を分かりやすく作成できる。 			
評価方法	<ul style="list-style-type: none"> 成績は、演習課題に対するレポートなどをまとめた成果物を提出させ、学習内容の全般的な実施状況とその内容を総合的に勘案して評価する。 総合評価 60 点以上を合格とする。 						
学習・教育目標との関係	建設環境工学コース (C-2)「特別な課題の遂行」に関する科目であり、平素の取り組みや達成度で評価する。						
関連科目	建設環境工学に関する全ての科目						
教材	必要に応じてプリントを配付する。						
備考	<ul style="list-style-type: none"> 課題に取り組んだ時間とその成果を報告書の形で記録しておくこと。 配布プリント以外の課題に取り組んだ場合、その成果は専用のノートに記載しておくこと。 配布された課題プリントはすべてファイルに綴じておくこと。 						

科目名	建設材料特論 Advanced Structural Materials			担当教員	岡崎 慎一郎 (窓口教員：林 和彦)		
学年	AS2	学期	前期	科目番号	17163049	単位数	2
分野	専門	授業形式	講義	履修条件	選択		
学習目標	1. 与えられた教材に対する輪講時の各人の説明を通して、自己学習能力や発表能力を涵養する。 2. コンクリートの劣化メカニズムを理解する。 3. 高性能・高機能コンクリートの特徴、性質、使用方法などを理解する。						
進め方	高性能・高機能コンクリートの特徴、施工上の留意点などについて学習する。授業では、各人に先ず分担箇所を発表・説明してもらった後、補足説明を行う。担当箇所の説明準備を自学自習に相当する時間数をかけて授業目までに各自準備し、作成したパワーポイントのファイルを提出する。						
学習内容	学習項目(時間数)			学習到達目標			
	1. コンクリートの物性(8) (1) 概要 (2) フレッシュ・力学特性・耐久性 (3) 材料、配合、製造、運搬 (4) 製造、施工			コンクリートの物性に関する理論と、その材料、配合、特性および使用上の留意点を説明できる。 (B-2), (E-1)			
	2. コンクリートの劣化(8) (1) 概要 (2) 塩害 (3) 中性化 (4) 乾燥収縮・クリープ (5) 硫酸劣化, 硫酸塩劣化			コンクリートの劣化に関する理論とその特徴、並びにその種類について説明できる。 (B-2), (E-1)			
	3. 高性能・高機能コンクリート(14) (1) 自己充填コンクリート (2) 繊維補強コンクリート (3) 各種化学混和材(剤)を用いたコンクリート (4) 防錆材を用いたコンクリート (5) 養生型枠で養生したコンクリート (6) その他			項目2の劣化現象に対して開発された、種々の高性能・高機能コンクリートについて、その社会的背景、理論、特徴および使用上の留意点について説明できる。 (B-2), (E-1)			
前期末試験							
評価方法	<ul style="list-style-type: none"> ・評価の内訳は、輪講時の説明30(%)、定期試験を70(%) (中間:50%, 期末50%) で評価する。 ・項目2終了後に中間テストを実施する。 ・出席率80%以上を認定のための条件とし、評点60%以上を合格とする。 ・自学自習については提出された発表用パワーポイントにより確認する。 						
学習・教育目標との関係	建設環境工学コースの必修得科目である。 建設環境工学コースの学習・教育目標(B-2)「土木工学の基礎知識」、(E-1)「設計力」に対応する。						
関連科目	建設材料学(3年) → 建設構造設計学(4年), 建設工法学(4年) → 建設材料特論(AS2)						
教材	適宜、プリント、ビデオ等を使用する。						
備考	本科目は、過去に学習した関連科目を発展および補強する意味を持つ。 学修単位：授業時間以外に1週に4(単位数×2)時間、計60(4×15週)時間の自学自習が必要。						

科目名	コンピュータ構造解析 Computational Analysis in Civil Engineering			担当教員	林 和彦		
学 年	AS2	学 期	前期	科目番号	17163050	単位数	2
分 野	専門	授業形式	講義	履修条件	選択		
学習目標	<ul style="list-style-type: none"> ・有限要素法を用いた構造解析を行う上でのプログラミング作法やアルゴリズムなどのノウハウを身につける。 ・建設系力学分野の設計に関連する幾つかの基本的問題について、その理論式の誘導、プログラミング手法の理解、計算、結果の分析、結果の報告を行うことができる。 ・コンピュータを有効に用いて自ら課題を処理し、処理結果をわかりやすくレポートにまとめることができる。 						
進め方	<p>有限要素法による構造解析の手法について、輪講形式で授業を進める。各自が予習ノートを作成し、授業では予習ノートの内容についてグループ討議を行う。</p> <p>有限要素法を用いて実際に解析を実行し、得られた結果を考察し、それをレポートにまとめる。</p>						
学習内容	学習項目（時間数）			学習到達目標			
	<ol style="list-style-type: none"> 1. ガイダンス(1) 授業内容と成績評価方法の説明 2. プログラミング作法(1) (1) Fortran を用いた有限要素法のプログラミング作法およびアルゴリズム 3. 有限要素法の基礎(8) (1) マトリックス解析法 (2) バネの力と変位 (3) 剛性マトリックスの作成 (4) 平面トラスと全体剛性マトリックス 4. 2次元弾性問題(8) (1) 応力とひずみ、変位とひずみ (2) 座標変換 (3) ひずみエネルギー (4) 三角形要素の剛性マトリックスの作成 (5) 三角形要素による全体剛性マトリックスの作成 5. 連立一次方程式の解法(4) (1) 連立一次方程式の解法アルゴリズム (2) バンドマトリックによる連立一次方程式の解法アルゴリズム 6. 有限要素法による解析(8) (1) 課題の設定 (2) 解析の実行 			<ul style="list-style-type: none"> ・ サブルーチン副プログラムを用いたプログラムのモジュール化およびアルゴリズムが理解できる。 ・ 簡単なマトリック解析法が説明できる。 ・ 平面トラスの有限要素定式化について理解できる。 ・ 応力とひずみの関係が説明できる。 ・ 座標変換マトリックスが理解できる。 ・ ひずみエネルギーが説明できる。 ・ 三角形要素による要素・全体剛性マトリックスが理解できる。 ・ 連立一次方程式の解法アルゴリズムが説明できる。 ・ 有限要素法プログラムを用いた解析を行い、解析結果について考察を加えることができる。 			
	前期末試験						
評価方法	定期試験 40%，輪講への取り組み（予習レポート） 30%，最終課題レポート 30%により評価する。						
学習・教育目標との関係	建設環境工学コースの必修得科目である。 建設環境工学コースの学習・教育目標(E-3)「コンピュータ等の有効利用」に対応する科目である。 報告書の作成に際しては、計算、作図、文書の全てにおいてコンピュータの有効利用が求められる。						
関連科目	基礎情報処理(2年)→応用情報処理(3年)→構造力学Ⅰ(3年)→構造力学Ⅱ、建設構造設計学(4年)→構造工学(5年)→耐震設計学(AS1年)→コンピュータ構造解析(AS2年)						
教 材	配布プリント						
備 考	学修単位：授業時間以外に1週に4（単位数×2）時間、計60時間の自学自習が必要である。						

科目名	環境防災工学Ⅱ Environmental Disaster Prevention Engineering II			担当教員	向谷 光彦		
学 年	AS2	学 期	前期	科目番号	17163051	単位数	2
分 野	専門	授業形式	講義	履修条件	選択		
学習目標	環境防災工学Ⅰで学んだ自然災害論，地震，耐震設計に関する基礎知識を深め，より現実的な応用地質学，斜面災害論，液状化問題に話題を広げ，防災と環境に関する一般的な知識を理解できる能力を涵養する。また，平常授業（演習・レポート含む）に対する真摯な取り組み態度を涵養する。						
進め方	授業内容は必要最小限の項目にとどめる。授業内容の理解を助けたり深めたりするために必要に応じて演習や平常テストを実施し，その理解度・習得度を確認しながら授業を進め，全員が授業内容を理解できるよう配慮する。自学自習時間に相当する課題を出題する。						
学習内容	学習項目（時間数）			学習到達目標			
	1. はじめに (1) (本科目の位置付け，授業内容と成績評価方法) 2. 応用地質学における環境防災(6) (1) 地形，地質 (2) 第四紀学，沖積，洪積 (3) 低地の環境 (4) 台地・丘陵地の環境 3. 斜面災害(7) (1) 地すべり (2) 斜面崩壊 (3) 土石流 (4) 落石			①応用地質学における地形，地質，低地，台地・丘陵地の環境問題が説明できる。 ②斜面災害における地すべり，斜面崩壊，土石流，落石問題が説明できる。			
	[前期中間試験]						
	4. 液状化(14) (1) 液状化による被害 (2) 液状化の予測 (3) 液状化被害を防ぐ工法 (4) 広域液状化危険度マップ 前期末試験			③液状化現象の基本原理が説明できる。			
評価方法	<ul style="list-style-type: none"> ・①～③を同じ重み（それぞれ30～35%）とする。 ・なお，中間試験や期末試験を提出物に置換することがある。 ・レポート：定期試験＝15%：85% とする。 ・自主学习についてはレポート提出により確認する。 						
学習・教育目標との関係	建設環境工学コース；(B-2) 総合学としての防災への集大成，適用。平成23年の東日本大震災を教訓として，これから何が出来るとの？専攻科生として，あるいは社会人に向けて，少し観念的なあるいは哲学的な事象を含めて，モノの考え方や見方の多様性を涵養すること。						
関連科目	環境防災工学Ⅰ，コンピュータ構造解析，連続体力学 → 環境防災工学Ⅱ						
教 材	参考書：福江正治ら著，地盤地質学，コロナ社 (社)地盤工学会編 土は襲う 地盤災害，石井一郎ら著 防災工学 森北出版						
備 考	学修単位：授業時間以外に1週に4(単位数×2)時間，計60時間の自学自習が必要である。						

科目名	環境倫理・マネジメント Environmental Ethics and Management			担当教員	多川 正		
学 年	AS2	学 期	前期	科目番号	17163052	単位数	2
分 野	専門	授業形式	講義	履修条件	選択		
学習目標	地球環境・地域環境問題における技術者の責務について考えることができる。						
進め方	授業内容の理解を深めるために、プリントを配布して教科書の内容を補足する。 毎回課題を出し、事例研究では実際の事例もしくは仮想事例を用い、技術者として環境にどのように関わっていけばよいかについて、グループディスカッションを行い、自己の考えをプレゼンテーションする機会を設ける。積極的な授業、議論への参画を希望します。 自学自習時間に相当する予習・復習・課題を毎回出題する。						
学習内容	学習項目（時間数）			学習到達目標			
	1. 環境倫理とは (10) (1) 授業の進め方, ガイダンス (2) 環境問題の特徴と倫理 (3) 環境倫理の基本 3 原則			・ 環境問題において倫理が問われる理由を説明することができる。			
	2. 事例研究と議論 (12) (1) 事例にみる環境倫理の考え方 (2) 環境と科学技術者の倫理 (3) 事例調査と議論			・ 事例研究を通じて、グループディスカッションを進行させ、自分以外の考えを聴き、自分の考えをまとめ、発表することができる。			
	3. 環境マネジメント (8) (1) 循環型社会、LCA (2) ISO14000 シリーズ (3) 企業における CSR への取り組み			・ LCA および ISO14000 の目的と考え方、および実施方法について説明することができる。			
	前期末試験						
評価方法	評価の内訳は、試験を 70%、レポート課題を 30%とする。総合成績にて 60 点以上を合格とする。 学習項目ごとの全体評価への重みは、1~3 のそれぞれについて同等 (33%) とする。 なお、試験を課題論文・発表に替える場合もある。 自学自習についてはレポート提出により確認する。						
学習・教育 目標との 関係	建設環境工学コース必修科目である。 建設環境工学コースの学習・教育目標 (A-1)「広い視野」に関係する項目を、試験結果およびレポート課題によって評価する。 学習・教育目標の達成には、地球規模での環境問題、エネルギー問題について、その原因と自分の考える解決案を文章にまとめ、発表できるようになることが求められる。						
関連科目	建設アセスメント (5 年) → 環境倫理・マネジメント (AS2)						
教 材	教科書：P. Aarne Vesilind, Alastair S. Gunn, (社)日本技術士会環境部会 訳編, 環境と科学技術者の倫理(丸善) 配布プリント 参考書：D. Meadows, J. Randers, D. Meadows; Limits to Growth The 30-year update 加藤尚武著, 新・環境倫理学のすすめ (丸善ライブラリー) 環境省編：環境白書, 経済産業省編：エネルギー白書 など						
備 考	参考書, 引用参考図書の貸し出しを随時行っています。有効に活用してください。 ・ 質問等はオフィスアワーに限らず、随時可 (事前に連絡があるとより確実な対応ができます) 出張・外出等の予定は教員室前のホワイトボードの予定表を参考にしてください ・ レポート類の提出先, 教員室の場所：建設環境工学科棟 2 階 環境工学実験室内 ・ 連絡先：087-869-3928, E-mail tagawa@t.kagawa-nct.ac.jp 学修単位：授業時間以外に 1 週に 4 (単位数×2) 時間, 計 60 時間の自学自習が必要である。						